

百済・榮山江流域と 倭の相互交流とその歴史的役割

The Mutual Interaction between Wa, Baekje,
Yeongsan River Basin and its Historical Role

中久保辰夫

NAKAKUBO Tatsuo

はじめに

- ① 甕・有孔広口小壺の共有現象
- ② 韓半島出土須恵器の検討
- ③ 日本列島・近畿地域における土器、集落、小規模古墳の動態
- ④ 5世紀後半から6世紀前半における日韓交流の展開

おわりに

【論文要旨】

本論は、日本列島・古墳時代および韓半島・三国時代の古墳・集落出土土器資料を対象に、5世紀代における榮山江流域を中心とする全羅道地域と日本列島中央部に位置する近畿地域との相互交流の実態を探ろうとするものである。そのために、次に述べる考古資料を対象に分析をおこなった。

第一に、5世紀代における東アジア情勢を概観したうえで、甕・有孔広口小壺という儀礼用土器に着目して、この土器が5世紀代に日本列島広域と全羅道地域を中核とする韓半島各地に共有される考古学的現象を捉えた。第二点目として、2000年代以降、榮山江流域を中心に資料数が増加した須恵器の時期比定を再検討し、日本列島における須恵器生産の再評価も加味して、須恵器に関しても日本列島と百済・全羅道地域の相互交流を確かめた。以上の土器からみえる相互交流は、近畿地域において有機的な関係をもって展開する集落出土韓半島系土器、手工業生産拠点、初期群集墳の動態と結びつけて捉えることが可能である。そこで第三の論点として、土器、集落、小規模古墳に関する近年の研究動向をふまえた上で、百済・榮山江流域との相互作用が、近畿地域内部における社会資本投資を促したという理解を提示した。

以上の考古学的検討により、これまで古墳・墳墓出土資料では不鮮明であった5世紀代における全羅道地域における倭との相互交流が明確となり、さらに倭人社会における社会変化に人的交流が果たした役割が少なくないことをあらためて確かめた。6世紀代においては百済と倭のより直接的な相互交流が活性化するが、こうしたあり方は必ずしも5世紀代からの連続的な過程として捉えることは難しく、近畿地域においても中央および地域社会をまき込んだ動的な変化が認められる。

【キーワード】 古墳時代、三国時代、韓半島系土器、手工業生産、初期群集墳

はじめに

本論は、日本列島・古墳時代および韓半島・三国時代の古墳・集落出土土器資料を対象に、栄山江流域を中心とする全羅道地域と日本列島中央部に位置する近畿地域との相互交流の実態を探ろうとするものである。

韓半島・三国時代における倭系土器に関する研究は、土師器系土器の出土から注目を集めていた韓半島南東部の洛東江下流域に加えて〔武末1988・1989・1991, 安在皓1993, 申敬澈1999, 井上主2008・2014, 久住2014, 趙晟元2016〕, 2000年代以降、百済やその周辺地域、そして栄山江流域を含む中・南西部において、須恵器をはじめとする倭系土器の出土例が増加したことにより、前進をみた〔木下2003, 酒井2005・2013, 武末2012, 土田2013〕。さらに、韓半島における陶質土器や軟質土器の新資料増加と相応して、日本列島から出土した韓半島系土器の系譜についても理解が深まってきた〔寺井2016, 坂・中野2016など〕。

たほう、日本考古学において古墳時代研究は、墳丘の規模や構造、埋葬施設や外表施設、副葬品研究、埴輪研究に比して、集落や土器に関する研究は低調であったが、花田勝広による近畿地域の鍛冶遺跡に関する悉皆的な研究〔花田2002〕, 和田晴吾や菱田哲郎による近畿地域における手工業生産の配置を大局的にまとめた議論〔和田2003・2004, 菱田2007〕, 若狭徹による群馬県域を対象とした古墳や集落の築造動態を地域開発と関連付けて論じた研究〔若狭2002〕, 奈良県南郷遺跡群の調査・研究を基礎とした古代豪族の勢力基盤に関する実態把握〔坂2009・2013, 青柳2014〕と着実に進展をみせた。さらに近畿地域では、韓式系土器研究会の精力的な活動を基礎に、韓半島系渡来系集団の居住地と目される集落の実態把握が進んでいる〔例えば、田中清2005, 青柳2005, 富山2005, 中野2007・2008, 中久保2008・2009, 古代学研究会2012〕。こうした日韓両地域における集落研究と土器研究の進展は、上述した韓半島各地の資料増加と連動しており、古代日韓交流に関しても、古墳・墳墓副葬品研究の成果とあわせて、集落出土資料から新たな像を描いていく段階にあるといえる。そして、これまで日本列島内部で進展したと考えられてきた変化に関しても、その要因の1つを国際環境の中で理解できるようになってきた。

こうした2017年現在の資料状況と研究段階の上に立ち、本論では古墳時代中期を主対象として、①主に日本列島と韓半島南西部で共有された儀礼用土器の存在に着目し、その意義を考察し、②栄山江流域における倭系土器の出土状況をまとめる作業をおこなう。その上で③同時期の日本列島・近畿地域における韓半島系土器の出土傾向および集落動態を検討し、栄山江流域と同調的に変化するあり方を古墳築造動向、手工業生産遺跡の分布を中心に複眼的に捉えてみたい。

なお、本論でいう古墳時代中期とは、土器型式でいう布留3式〔寺沢1986〕をそのはじまりと考え、続くTG232型式期からTK23・47型式期までを指す。⁽¹⁾①で取り扱う儀礼用土器とは、偏球形を呈する体部の中央に穿孔を有する甗・有孔広口小壺であり、穿孔部に竹管等を差し、内容物を給仕したと考えられる土器である。この土器は、日本列島内で生産された須恵器としては甗と呼称され、韓半島の陶質土器としては有孔広口小壺あるいは有孔広口壺という名称が一般的である。5世紀代は液体物を湛えるために体部が口縁部に比して大きい⁽¹⁾が、6世紀以降では徐々に頸部および口

縁部がいちじるしく伸長し、内容量は減少していく型式変化を遂げることから、仮器化の進行を型式変化の方向として捉えることができる土器である。この系譜をめぐって、これまでも多くの研究が蓄積されているが、本論では系譜の追求より、その共有性を重視したい。

以下に展開していく議論は、①儀礼用土器の検討では、日本列島から韓半島にかけての長距離を取り扱うのに対して、②・③では栄山江流域や近畿地域といった50～100km以内の地域を対象としたスケールを用いる。集落の動態を考える上では、さらに10km以内の詳細な尺度を用いた方がより実態に接近できるために、議論を進めるにつれて地理的範囲が狭まっていくことを先にことわっておきたい。こうした論述は、国際関係の変化とともに大小の空間規模をもつ社会がどのようにその影響を受け、また地域社会が主体的にその変化に対応したのかといった議論を深めていくことになると考える。

①……………甗・有孔広口小壺の共有現象

4世紀後葉から5世紀における東アジア勢力図 数多くの器種がある当該時期の土器のなかから須恵器・甗と陶質土器・有孔広口小壺を取り扱い、倭と百済、栄山江流域の相互交流を検討するために、まずは4世紀後葉から5世紀における東アジア情勢を把握することからはじめたい。

とりわけ5世紀代の倭や百済をとりまく国際情勢を把握する上では、中国本土が五胡十六国時代と呼ばれる政治的不安定期あるいは模索期を経て〔三崎2012〕、南北朝時代に至った歴史的な前提に留意する必要がある。そして、重要となるのは高句麗の動向である。4世紀から5世紀にかけての日韓関係を取り巻く変化を以下のように理解したい。

西暦313年頃の楽浪郡・帯方郡滅亡以降、中央集権化をすすめた高句麗は、340年代に前燕の慕容氏によって侵略を受け、350年代には前燕に冊封される。「十六国」として韓半島、特に高句麗は中原や遼東・遼西での抗争敗退後の避難所的性格を指摘する見解もある〔三崎2012：p.152〕。こうした4世紀前半の政情が高句麗の南下の前提となり、高句麗は369年、371年と百済へと侵攻するが、いずれも敗退する。371年に戦死した高句麗の故国原王をついで即位した小獸林王、その次の故国讓王は内政を重視し、391年に即位する広開土王が高句麗の勢力拡大に大きな役割を果たすこととなる。広開土王は385年に建国直後の後燕の遼東地方に進出し、その後後燕滅亡まで攻防が繰り返される。

中国本土北方における勢力盛衰も重要である。西暦386年、後の道武帝となる鮮卑拓跋部の首長である拓跋珪が北魏を建国し、中原に進出する。北魏の勢力拡大に際し、391年以降、交戦を重ねた中国東北部の後燕は国力衰退し、407年には滅亡する。こうした中国東北部における軍事的脅威の解消が、広開土王による南下政策への歴史的背景となった。

4世紀以降長期的な流れとしてあった高句麗による軍事的脅威の増幅は、撞球のように韓半島各地の政体に多大な影響を与え、とりわけ百済は高句麗との度重なる交戦を繰り返した。4世紀後半には、百済はその打開策として、東晋との通交を開始し、また七支刀を倭に贈与するなど、他の仲介勢力を経て倭との軍事的な同盟を模索した〔吉田1998、鈴木2002〕。たほう、韓半島南東部では高句麗との政治的結びつきを深めた新羅からの圧迫によって、5世紀には、4世紀に倭との密接な

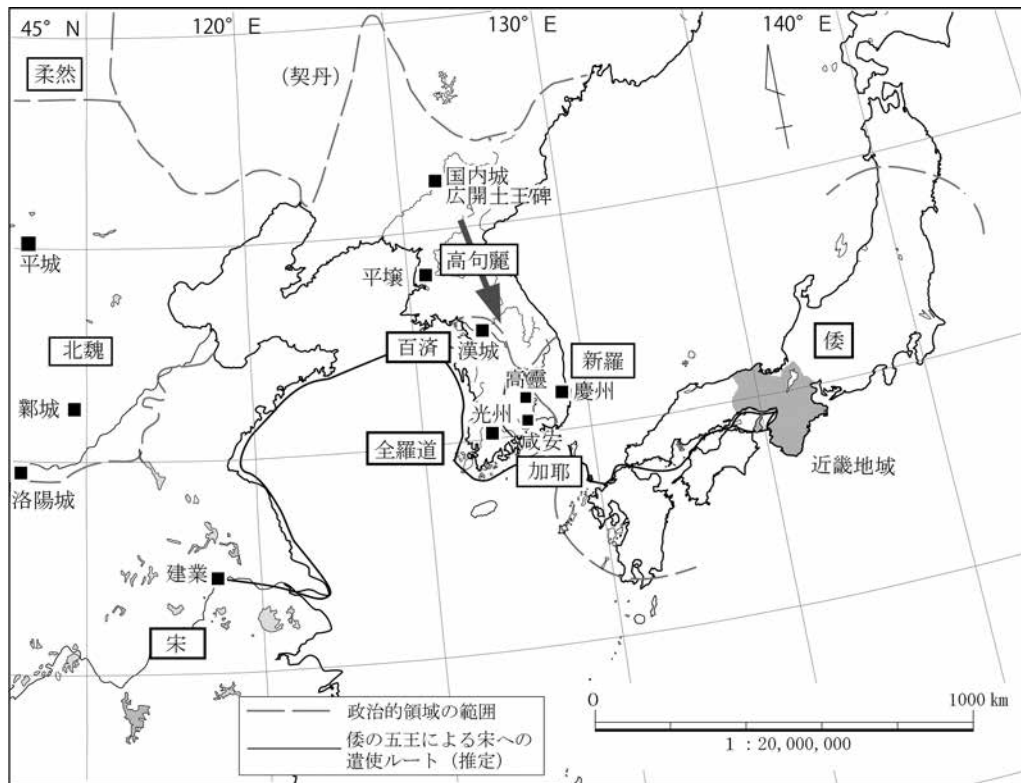


図1 5世紀代における東アジア情勢

関係を深めた金官加耶に衰退の兆しがみえる。洛東江東岸・東萊地域では、福泉洞 21・22号墳など、新羅の影響が陶質土器や金銅冠に早く認められる。ただし、5世紀中葉と位置づけられる福泉洞(東) 1号墳の副葬品などに独自性がみられ、5世紀前半代においてもこの地域が一定の政治的位置があったことは確実視できる [高田 2014]。一方、金官加耶の王墓群である大成洞古墳群は大成洞 1号墳の築造後、大成洞 73号墳などにみられるように造墓は継続するが、勢力は衰微したとみられる。4世紀後半から5世紀前半にかけて、韓半島における勢力関係に変化がみられることをここで確認したい。

5世紀前葉の中国本土に再び目を向けると、北魏は中国東北部を勢力圏とした北燕を436年に滅ぼし、439年、太武帝の時に華北を統一する。華南では420年、劉裕が宋建国。こうした勢力図変更によって、実態としては錯綜しながらも、高句麗と北魏、百濟と宋といったように東アジア世界における勢力図はこの時期にもまた更新されることとなった。

古墳時代政権交替論と日韓交流論 こうした国際情勢の変化に対処するため、倭の政治勢力は2つの打開策を講じていたことが、近年の研究成果において明確となった。1つは、4世紀第2四半期から5世紀初頭にかけて、筒形銅器や巴形銅器、石製品等の共有にみられた金官加耶との強い連携 [田中晋 1996, 福永 1998, 井上圭 2014] が5世紀前葉には確実に不調となり、韓半島南東部各地の政治勢力と新たな関係を構築しようとしたことである [朴天秀 2007・2009, 高田 2014]。考古学による日韓交渉論は、金工品や武器・武具の分析を通じて、日韓首長間の政治的関係が新旧勢力の交替とともに変動したことを明らかにし [高橋 2007, 朴天秀 2009, 井上圭 2014, 高田 2014]、とりわ

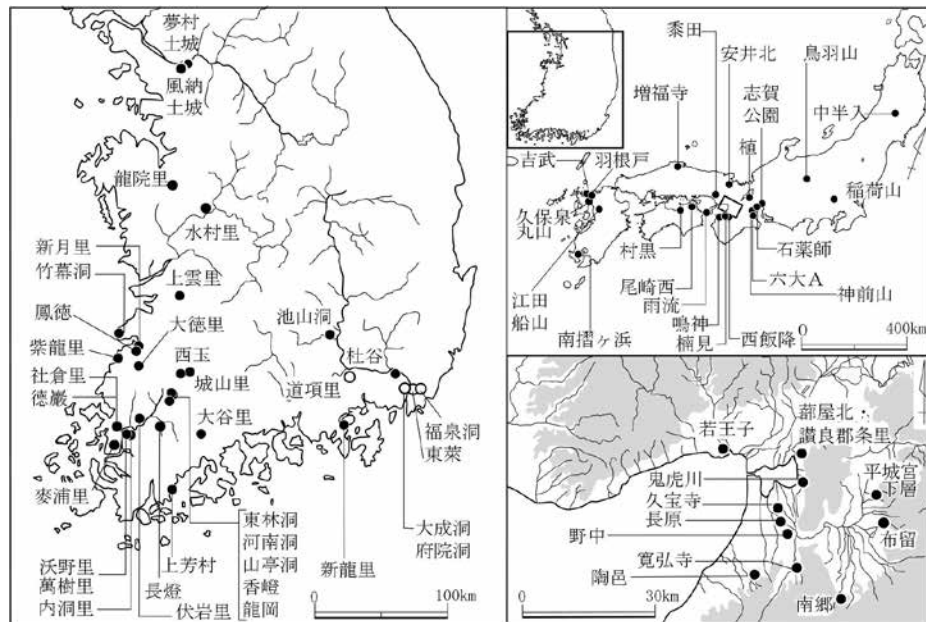


図2 主要対象遺跡分布図

け5世紀前半における新羅・阿羅加耶との関係強化および5世紀後半代における大加耶との連携を導き出したことは大きな成果である [朴天秀 2009]。金官加耶から阿羅加耶，大加耶といった韓半島南部における勢力変化とともに，大和北部勢力から河内勢力へと倭の中央政権内部における主導勢力の交替を関連付けて理解できることも，副葬品研究の進展によって明確になっている [朴天秀 2007・2009]。最近では，5世紀代に倭系甲冑が倭系鉄鍔とともに韓半島南東部の洛東江流域，とりわけ釜山・金海地域を中心に分布することも判明した [鈴木 2016]。近畿地域の限定的な工房で一元生産された甲冑が，韓半島各地の勢力にもたらされた歴史的な文脈については，今後も日韓の研究者による検証が必要であるものの，エリート層を中心に威信財の配布や共有によって結ばれた交渉関係は，具体的に復元できる。以上の研究成果は，東アジア情勢の変化に伴い，それに呼応した勢力の盛衰が認められ，さらに新興勢力間の政治的関係がその都度，構築されたことを示している。そして，詳細にその関係を見極めれば，日韓各地における勢力のしたたかな政治的思惑や多元的な関係まで踏み込んで議論できる段階にある [高田 2014]。

「倭の五王」の時代の対外交流 たほう，5世紀代における倭の主導政治勢力が講じた2つ目の対策は，これまで文献史学が重要視してきた中国南朝・宋への遣使である。420年，劉裕が宋を建国したことによって，対高句麗という外交政策で一致していた百済との外交ルートは，ここに強化される [吉田 1998, 鈴木 2002, 田中史 2005]。『宋書倭国伝』には，倭国を代表した「倭の五王」が宋に上表文を送ったことが記されており，この外交史的な意義に関しては文献史学を中心にこれまでも重厚な研究史がある。

しかしながら，日本列島の古墳出土資料では，4世紀後半はもとより，5世紀前半代において中国系文物，さらには宋へと至るルート上にある百済や栄山江流域もふくめて極めて限定的であり，古墳副葬品では百済・大加耶系と系譜をひろく把握すべき資料が多い [高田 2014]。むしろ，横穴式石室の導入や金工品などを手がかりとして，6世紀初頭前後に百済の武寧王と倭の継体大王との

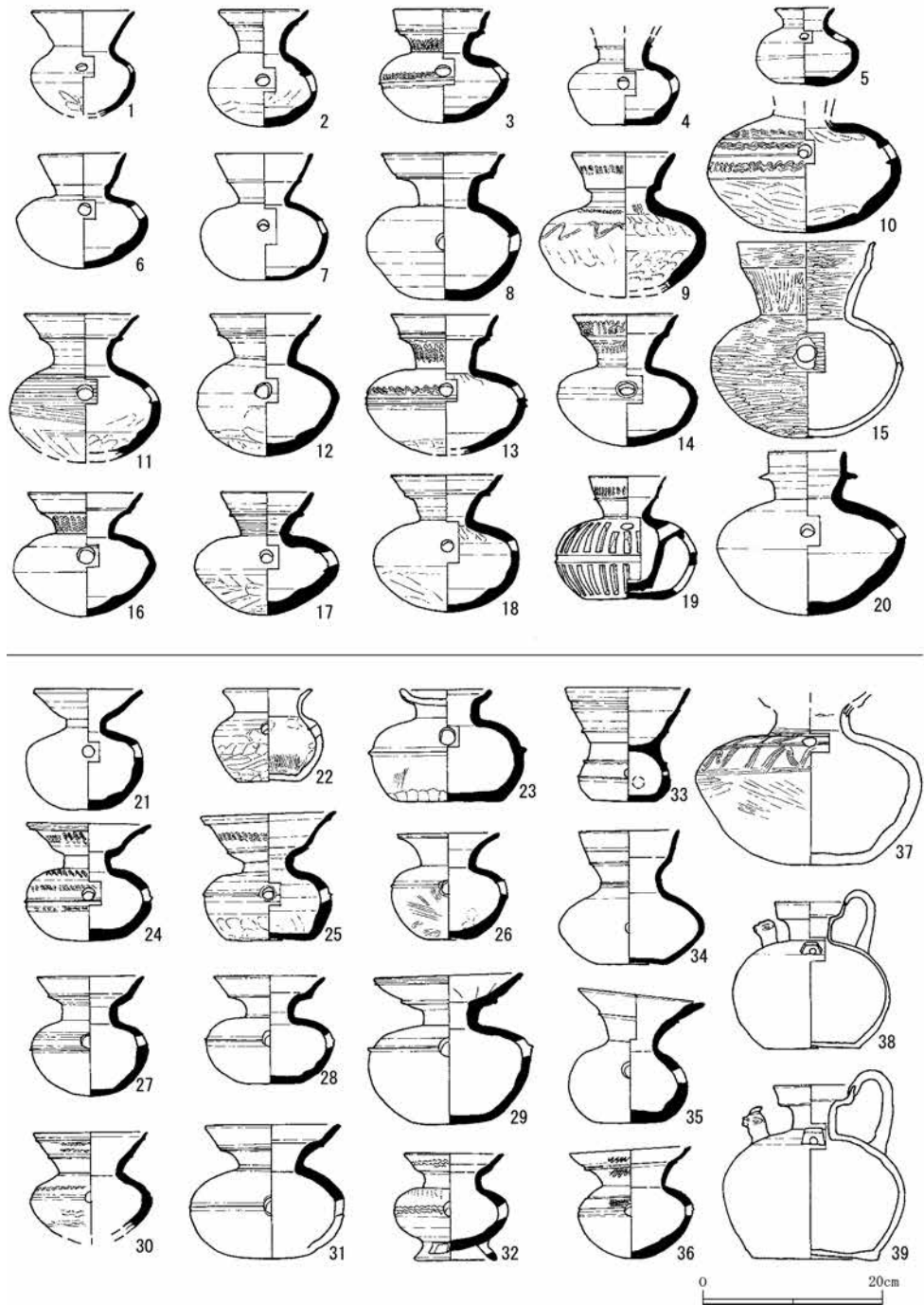
政治的連携を読み取り、百済・倭の結びつきを論じてきた。近畿地域では、古墳築造動態や副葬品内容の変化を論拠としたいわゆる継体期における考古学的研究がいちじるしく進展し〔たとえば、福永2007、朴天秀2007〕、須恵器型式でいうMT15～TK10型式期（以下では、型式を省略する）に画期が求められている。

一方、5世紀前半を中心に日本列島・近畿地域の集落遺跡から出土する韓半島系土器のなかで、韓式系軟質土器とよばれる主として調理に用いられた土器群〔田中清2005、中久保2012〕は、その主な系譜が韓半島中西部・南西部に求められることが確実視できる。蒸し器である甑を対象として、早くにこの点を詳細に検討した酒井清治は、「畿内では百済南部を中心に伽耶西部および伽耶の沿岸沿いの地域との交流が顕著であった」とまとめる〔酒井1998：p.37〕。最新の出土資料をもとに甑の系譜を再検討した寺井誠も、日本列島出土甑を全般的にみた場合、「百済・馬韓もしくは伽耶西部に系譜が認められるものが圧倒的に多く、伽耶東部や新羅の系譜のものはわずかである」と酒井の指摘を確かめた〔寺井2016：p.83〕。筆者も摂津地域における韓式系軟質土器を集成し、韓式系軟質土器にみられるタタキ目や甑の蒸気孔形状より、この点を追認している〔中久保2008〕。このことから、古墳出土資料からは見出しにくい百済・栄山江流域地域との交流関係は、むしろ集落出土土器資料に顕著であるといえるのである。

さらに、栄山江流域と倭の相互交流を復元するためには、須恵器・甗や陶質土器・有孔広口小壺という儀礼に用いられたと考えられる土器の存在が注目できる。

甗と有孔広口小壺の創出と広域共有　そこで日本列島各地から出土した須恵器の甗と韓半島から出土した有孔広口小壺について考察したい。この土器の系譜をめぐっては様々な学説が提示されている。1つの有力な学説は、韓半島南西部の栄山江流域を中心とする地域に陶質土器・有孔広口小壺の系譜を求める〔徐聲勳・成洛俊1984、盧美善2004、徐賢珠2006〕。しかし、近年、須恵器出現年代に関する手がかりが増加した結果、須恵器・甗の出現が有孔広口小壺より古く、日本列島で自生したという見解も提示されるに至った〔酒井2005・2013〕。また、研究の初期段階を振り返ると、有孔広口小壺は嶺南地域に広く分布する広口小壺から連続的に変遷したことが指摘されている〔李殷昌1978〕。そのため、甗の系譜は栄山江流域創出説、洛東江流域の広口小壺由来説、そして日本列島自生説があることとなる。このうち、広口小壺は、甗や有孔広口小壺が出現する段階において口縁部が著しく発達し、平底でごく小さな体部をもつ型式に属する資料が多いために、機能的な類似性を認めることはできないが、5世紀初頭前後から後半にかけて甗と有孔広口小壺は、日本列島広域から全羅道にかけて広く分布し、さらに栄山江流域を含めた韓半島各地では地域色を有しながらも、全羅道と日本列島広域では口縁部の伸長化による仮器化といった現象も同調的に変化する。したがって甗と有孔広口小壺は、日本列島と全羅道地域を中心とする韓半島との相互交流を物語る資料として評価でき、この種の土器は内容物について不明な点が多いものの、胴部に穿たれた円孔に細い木筒などを差し込んで用いられた給仕用の土器であるといった共通の用途が考えられるために、これを用いた儀礼の共有が背後にあることは確実視できる。以下では、この共有性を念頭におきながらも、日韓の差異や土器の変遷に着目して論述をすすめる。

須恵器・甗の特徴と型式変化　須恵器の甗は、出現期の資料として陶邑・TG232号窯例（図3-1）をあげることができ、奈良県・南郷遺跡例（2）も同時期である。つづく陶邑・ON231号窯で



日本出土 1. 大阪 TG232号窯 2. 奈良 南郷・千部遺跡 3. 大阪 ON231号窯 4. 香川 村黒遺跡
 5. 和歌山 鳴神・音浦遺跡 6. 兵庫 若王子遺跡 7. 大阪 讃良郡糸里遺跡 8. 福岡 吉武遺跡
 9. 香川 尾崎西遺跡 10. 愛知 志賀公園遺跡 11. 大阪 長原45号墳 12. 鹿児島 南摺ヶ浜遺跡
 13. 三重 六大A遺跡 14. 和歌山 西飯降II遺跡 15. 兵庫 雨流遺跡 16. 大阪 TK216号窯
 17. 岩手 中半入遺跡 18. 滋賀 植遺跡 19. 長野 鳥羽山洞窟 20. 兵庫 黍田F号墳
 韓半島出土有孔広口小壺 21. 務安 社倉里甕棺墓 22. 光州 河南洞遺跡 23. 完州 上雲里遺跡
 24. 靈岩 萬樹里2号墳 25. 萬樹里4号墳 26. 羅州 長燈遺跡 27. 光州 東林洞遺跡 28. 高敞 鳳德遺跡
 29. 光州 東林洞遺跡 30. 靈岩 沃野里1号墳 31. 光州 河南洞遺跡 32. 高敞 鳳德遺跡 33. 東萊 福泉洞22号墳
 34. 咸安 梧谷里遺跡 35. 固城 新龍里遺跡 36. 陝川 池山洞石槨墓5号 37. ソウル 風納土城
 陶磁器 鶏首壺 38. 南京 司家山3号墳(謝温墓) 39. 天安 龍院里9号石槨墓

図3 須恵器・甕と陶質土器・有孔広口小壺

は、頸部が直立する形状のものがみられ(3)、このほかにも初期須恵器には香川県・村黒遺跡例(4)、和歌山県・音浦遺跡例(5)など、抹角平底を呈する資料も少数派ながら認められる。しかし、基本的な甗の器形は、丸底の底部に球形の体部を有し、直線的ないし口縁部と頸部の境に一条の突線を有するものである。こうした特徴は、同時期の土師器・小型丸底土器と同形であることから、両者の親縁性をうかがうことができ、土師器の甗も須恵器にともなって出土する[中久保2017]。

須恵器・甗の型式変遷は、口縁部形状に着目することによって捉えやすい(図3)。すなわち、TG232号窯にみる直線的な口縁部(1)から短く立ち上がる頸部に外反する口縁部形状をもつもの(兵庫県・若王子遺跡例:6)、頸部と口縁部に突線を1つ有するもの(大阪府・讃良郡条里遺跡例:7)、頸部と口縁部の境となる内面にわずかな段を有するもの(大阪府・長原45号墳例:11、鹿児島県・南摺ヶ浜遺跡例:12)、頸部が外反し、内面に段をもち、口縁部が短く外反する大阪府・TK216号窯例(16)、岩手県・中半入遺跡例(17)、内面の段がさらに明瞭になる滋賀県・植遺跡例(18)といったように直線的な口縁部から二重口縁へと変化すると考えられる。これと関係して、器形も丸底から尖り底へと変化し、さらに穿孔の位置も胴部最大径の上方から次第に胴部中央へと下がる。たほ、ON231号窯例にみられた直立する頸部をもつ甗もまた福岡県・吉武遺跡例(8)、三重県・六大A遺跡例(13)などにみられ、穿孔は有しないものの、香川県・尾崎西遺跡例(9)などにもみられる。こうした資料は、栄山江流域の光州・東林洞例(27・29)、全羅北道の高敞・鳳徳遺跡例(28・32)などと類似しよう。吉武遺跡例は、平底気味の底部を有していることも含めると、韓半島から搬入された可能性あるいはその影響のもと、日本列島、おそらく北部九州で製作された可能性を考えたい。須恵器・甗の基本的な型式変化は、須恵器生産の一大拠点である陶邑において認められるものであり、その製品が南九州(12)から東北南部(17)まで、広く展開していることが看取できるが、その一方で宮城県・大蓮寺窯などにおいても陶邑の技術移転を确实視できる製品が生産されている。ただし、吉武遺跡例などにみる製品を九州地域における初期須恵器の地域的な特徴とみなせば、その規範から逸脱し、むしろ栄山江流域からの影響も読み取ることができよう。

さらに特殊な甗を例示すると、体部に多くの透窓を配し、二重底となる二重甗(長野県・鳥羽山洞窟:19)、外面が黒色磨研された兵庫県・雨流遺跡例(15)、有蓋口縁部をもつ兵庫県・黍田F号墳例(20)がある。いずれも5世紀前葉から中葉に位置付けられ、現状では日本列島においてのみ確認できる。

韓半島出土有孔広口小壺の特徴 韓半島では、有孔広口小壺は5世紀前葉から6世紀中葉を中心に製作され、韓半島南西部にあたる全羅道地域を核として分布する。陶邑窯跡群の製品と比較すると、①陶邑では丸底を主体とするのに対し、全羅道地域では抹角平底あるいは平底の底部を有し(図3-21, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 31)、②短く、直立する頸部をもち、二重口縁となること(図3-21, 23, 24, 25, 27, 28, 29, 31, 32)を主な特徴として、③穿孔がなされる胴部最大径の位置に一条の突線をめぐらせるものが多い(図3-23, 24, 25, 26, 28, 29, 31)。さらに高敞・鳳徳遺跡例(32)など、高敞系土器と呼べる短脚高杯[酒井2005]と脚部が同一の台付甗も確認できる。このうち、①平底を有する須恵器・甗(図3-4・5, 8)、②直立した短頸部(図3-3, 4, 8, 9)、③胴部突線(図3-3, 13)など、日本列島出土例と属性として共通する資料があり、先に吉武遺跡例(図3-8)と高敞・鳳徳遺跡例(28)、光州・河南洞遺跡例(31)との類似性を指摘したが、陶邑・ON231号窯例(図3-3)にもこうした属性が認められる。ON231号窯の製品や器種構成が、百済・全羅道の影響が強

いという指摘は示唆的である [田中清 2002, 酒井 2004]。

一方で、全羅道地域以外においても高霊・池山洞石槨墓 5 号出土の須恵器・甗 (図 3-36) などの搬入品に加えて、東萊・福泉洞 22 号墳, 福泉洞 (東) 1 号墳, 金海・杜谷 49 号墳, 咸安・道項里 (慶) 13 号墳例, 咸安・梧谷里遺跡例 (図 3-34), 固城・新龍里遺跡例 (図 3-35) など, 加耶各地においても出土例を確認できる。ただし、東萊・福泉洞 22 号墳 (図 3-33) は、広口小壺の下部に小孔を穿ったものであるが、これは甗・有孔広口小壺のように注口とするものではなく、おそらく焼成時の火まわりをねらった細工であり、甗に鈴付二重甗 (例えば図 3-19) が存在することを勘案しても、鈴付土器としての用途が後の主流となる甗・有孔広口小壺につながるとは理解できない。咸安・道項里 (慶) 13 号墳例については、咸安を中心に分布する阿羅加耶系陶質土器の器種構成において主体とはならず、栄山江流域の有孔広口小壺への影響は不鮮明である。この古墳より三角板革綴短甲が出土しており、5 世紀初頭から前葉に位置づけることが可能であるから、この有孔広口小壺についても阿羅加耶と倭の交渉という文脈で理解可能である。咸安・梧谷里遺跡例 (図 3-34) は平底で、頸部中位に突線をめぐらせることが陶邑で製作された資料と異なる点であり、おそらく在地生産と考えられるが、こうした特徴は全羅道の製品には継承されない。固城・新龍里遺跡例 (図 3-35) をはじめとして、韓半島南海岸固城の地域にも甗が出土するが、すでに井上美奈子が指摘しているように、栄山江流域から伝播した有孔広口小壺が当地で製作されたものとみなす理解を支持したい [井上美 2004]。このように、新羅・金官加耶, 大加耶, 阿羅加耶, 小加耶といった勢力圏の有孔墳墓より 5 世紀前半から後半にかけて須恵器の甗や有孔広口小壺が出土し、独自生産がなされていたことは確かであるが、それは少数派であり、さらに池山洞古墳群や杜谷古墳群, 道項里古墳群など、倭系甲冑の分布と重なりをもつ。すなわち、5 世紀代における倭と韓半島各地の政治的交渉を反映している蓋然性が高い。そして、栄山江流域を中心とする全羅道地域に最も有孔広口小壺が出土している分布的な集中を、十分に見出しがたかった日韓交流の側面をあらわしているものとして、ここでは注目したい。

系譜の検討 以上の点をふまえた上で、あらためて須恵器の甗と有孔広口小壺の起源にかんしても、指摘しておきたい。これまで系譜をめぐる研究では、務安・社倉里甗棺墓例 (図 3-21) が TG232 号窯例 (1) との比較のなかで注目されてきたが、再実測したところ、本例は頸部がわずかに直立し、内彎気味の口縁部を有する抹角平底の例であり、TG232 号例とは細部形状が異なる。こうした特徴をもつ有孔広口小壺が萬樹里 2・4 号墳例 (図 3-24・25) につながる、あるいはその影響下にあると考えられるが、須恵器・甗の特徴そのものであるとはいえない。先述の通り、須恵器の甗は頸部が湾曲する直線的な口縁が頸部と口縁部の境に突線を 1 つ有するものへと変化し、さらに突線内側に段が形成され (二重口縁)、それがより明瞭になるといった変化を遂げるが、全羅道地域の口縁部は短く直立した頸部に内湾する口縁部であり、若王子例 (図 3-6) と口径や口縁端部の調整において異なる。むしろ、甗の口縁部は、全羅道出土例よりも同時期の小型丸底土器と類似性が高く、主流となる須恵器・甗は在来の土師器との密接な器形的類似性のなかで捉えることが妥当であろう [中久保 2017]。

一方、平底の底部に外反する口縁部を有する光州の河南洞遺跡例 (図 3-22)、直立する頸部をもつ完州・上雲里遺跡例 (図 3-23) は、有孔広口小壺の系譜をたどる上で祖型の候補となる。これら

は共伴土器から5世紀後半に位置づけられる栄山江流域の東林洞遺跡例(図3-27・29)、高敞・鳳徳遺跡例(図3-28・32)に形式的に先行する型式と理解するが、河南洞遺跡例は4世紀代にさかのぼる蓋然性は低い。たほう、上雲里9号木棺例は4世紀後半と報告されており、初現例の可能性のあるものの、共伴土器は広口壺1点のみであり、類例増加を期待したい。こうした小壺が、有孔広口小壺の成立に影響を与えた可能性は十分推測でき、短く直立したのちに内彎する口縁部が伸長し、二重口縁部となるという型式変化をたどったとみたい。それが先に述べた全羅道における有孔広口小壺の特徴へとつながると予察したい。

このように日本列島、とりわけ近畿地域と韓半島・全羅道地域において、双方の在来土器を基礎として、新たに出現したと推測できる甗・有孔広口小壺であるが、どちらの地域においても先行して焼成前穿孔をおこなう土器は⁽²⁾なく、細い木筒を差して注口となすものは少なくとも土製品ではみられない。そこでこの機能や器形にかんする手がかりを視野を広げて探してゆく必要がある。いまの議論にとって、甗と有孔広口小壺の祖型を中国陶磁・鶏首壺(天鶏壺、鶏頭壺とも呼称される)に求める小池寛の見解はあらためて注目できる[小池1999]。韓芝守が悉皆的に集成したように、百済に中国陶磁が都城域を核に出土例が多く認められることとなり[韓芝守2002]、近年、調査・報告された韓半島中西部に所在する天安・龍院里古墳(図3-39)、公州・水村里古墳など、中国南京・司家山3号墓出土例(図3-38)に酷似する搬入品がみられるようになった。この司家山3号墓は、墓誌から被葬者が406年に没したことが判明しているため、5世紀初頭に位置づけることが可能である。天安・龍院里9号石槨墓例は馬具などから4世紀末に、水村里4号墳例は馬具の製作年代が5世紀中葉に時期比定されており、後者は中国陶磁器の製作年代と時期差がある点が指摘されている。[諫早2012]。諫早は本例を伝世とは想定せず、入手時期の微妙な差や被葬者の生前の活動期間の差との関連性を指摘する。馬具との取り扱いの差異が気になるところであるが、鶏首壺の入手時期は5世紀を前後する時期にあったとみて大過なく、甗と有孔広口小壺の出現時期に、飲料を注ぐ注口付陶器が中国系奢侈品として限定的ながらも韓半島中西部に広がっていたことは推察できる。

そこで着目したい資料は、ソウル・風納土城慶堂地区206遺構(井戸)出土黒色磨研土器の有孔広口壺(図3-37)である。形状に目を向けると、平底の底部に胴部が張る器形、穿孔の位置は肩部に位置することが、鶏首壺と類似する。ただし、鶏首壺に特徴的な鶏頭注口部の意匠、肩部に配された方形つまみと把手の有無、そして施釉技術など、有孔広口小壺と鶏首壺の差異は大きい。こうした違いは技術的格差もさることながら、鶏首壺が具現化する中国思想までは十分に理解していなかったことによることが大きいだろう。ただ、全羅道地域に多くみられる有孔広口壺が、黒色磨研土器としても製作され、百済土器、全羅道や忠清道系の土器と共伴して百済王都の祭祀遺構でみられることは、間接的ながらもこうした土器の出現背景を考える上で重要となる。器形や焼成技術の大きな差異を認めつつも、注口付土器を創出する意匠的背景に、鶏首壺の存在が大きかった可能性は指摘しておきたい。中国陶磁を含めたさらなる比較検討が必要である。

以上、甗・有孔広口小壺をてがかりとして、古墳・墳墓副葬品には十分に見出しがたかった日本列島と全羅道地域との交流関係について考察を進めてきた。この両地域は直接的に、そして倭と百済は間接的ながらも関係を有していたとみることもできる。

②……………韓半島出土須恵器の検討

本節では、韓半島出土須恵器のなかでも全羅道地域から出土した須恵器および須恵器系土器に着目して、その時期的特徴と出土傾向をまとめることとしたい。韓半島から出土した須恵器の型式比定については、ソウル・夢村土城第3号貯蔵穴、公州・艇止山遺跡や扶安・竹幕洞祭祀遺跡といった祭祀遺跡、清州・新鳳洞古墳群をはじめとして、すでに木下亘、酒井清治、武末純一、土田純子らの研究があり、その型式比定はいまなお妥当性を有している〔木下2003、酒井2013、武末2012、土田2013〕。

すなわち、栄山江流域を中心とする全羅道地域では、TK73期～TK216期に少数ながら須恵器が認められ、TK208期以降、とくに最も増加し、MT15期では減少する（表1・2、図5）。TG232期に位置づけられる須恵器は、現段階では全羅道地域において発見できていないが、加耶土器との区別が難しいため、今後の課題となる。以下では、出土傾向の検討をすすめよう。

全羅道地域から出土した須恵器の出土器種は、在地で模倣製作された須恵器系土器〔木下2003、酒井2013〕を含めても、甗、杯身・杯蓋が多い。有蓋高杯、無蓋高杯も少数ながらみられ、基本的に給仕用の儀器である甗と供膳器によって占められる点を指摘できる。同時期の日本列島と比較すると、全羅道地域では須恵器の高杯が少ないといえるが、そもそも全羅道地域では高杯の出土数が少ないために、土師器の高杯を初期須恵器の段階で主要供膳具とする日本列島との食膳形態の差異が、こうした器種の選択性にはたらいていると考えたい。

たほう、大型・中型の貯蔵具は、光州・東林洞遺跡71号溝（図6-11）以外、出土例が不明瞭である。壺や甗の中・大型器種は、破片となって出土することが多く、このことが識別を困難にしている要因であるかもしれない。ただし、今後の資料増加をもってしても、現在の傾向が妥当であるのだとすれば、内容物の運搬や貯蔵が主目的ではなかったことが考えられよう。このように須恵器の全器種が出土したわけではなく、全羅道地域における須恵器受容には、在来の集団による選択が働いている。

杯身・杯蓋の型式 韓半島出土須恵器杯身・杯蓋の時期比定をおこなう上では、須恵器系土器と識別をおこないつつ、陶邑窯における杯身・杯蓋の口縁部形状の変化、口縁部径の変遷のなかで位置づける必要がある。そこで、本稿では杯身・杯蓋の口縁部形状の変化について、北山峰生による分析手法をもとに時期比定をおこない〔北山2007・2008〕、さらに完形品は最大径を計測し、破片資料は口径を復元し、それを田辺昭三が提示した各須恵器型式の指標となった窯出土資料〔田辺1966〕と比較することによって、全羅道出土資料の時期を比定した。その結果をもとに作成した変遷図が図6である。先に述べたように、全羅道出土資料は、その多くがTK208期以降、とくにTK23・47期に最も増加する。暦年代では、5世紀後半に相当する時期であると考えられる。ただし、いまの作業において、TK208期をさかのぼるTK73期～TK216期については、須恵器の杯身が出現する段階であるために、陶邑窯跡群における内在的な変化のみならず、全羅道地域からの影響を十分に考慮する必要がある〔田中清2002、酒井2004・2013〕。

まず、光州・東林洞遺跡101号溝出土杯身（あるいは直口壺、図6-1）は、栄山江流域で生産され

表1 陶邑窯における杯身・杯蓋の口縁部形状の変化

| 口縁部形状 | 杯蓋 | | | | | 杯身 | | | | | |
|---------|----|---|----|----|---|----|----|----|----|----|---|
| | a | b | c1 | c2 | d | a | b1 | b2 | c1 | c2 | d |
| TK208号窯 | ○ | ○ | | | | ○ | | | ○ | | |
| TK23号窯 | ○ | ○ | | | | | ○ | | ○ | | |
| KM1号窯 | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | | |
| TK47号窯 | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | | | |
| MT15号窯 | | | ○ | | | | ○ | ○ | | | |
| MT14号窯 | | | | ○ | | | ○ | ○ | | | |
| TK10号窯 | | | ○ | ○ | | | | ○ | | | |
| TK43号窯 | | | | | ○ | | | | | | ○ |

表2 全羅道出土杯身・杯蓋の口縁部形状

| 口縁部形状 | 杯蓋 | | | | | 杯身 | | | | | |
|-----------|----|----|----|----|---|----|----|----|----|----|---|
| | a | b | c1 | c2 | d | a | b1 | b2 | c1 | c2 | d |
| 高敞 紫龍里 | | | | | | ○ | | | | | |
| 光州 東林洞 | ○ | ○ | | | | ○ | | ○ | | | |
| 光州 山亭洞 | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | |
| 光州 河南洞 | ○ | | | | | ○ | ○ | | | | |
| 高敞 鳳徳 | | | | | | | ○ | | | | |
| 高興 寒東 | | | | | | | ○ | | | | |
| 長興 上芳村A | | ○? | | | | | ○ | | | | |
| 光州 香燈 | | ○ | | | | | | | | | |
| 羅州 長燈 | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | |
| 昇州 大谷里한실 | | ○ | | | | | | ○ | ○? | | |
| 羅州 伏岩里2号墳 | | ○ | | | | | | ○ | | | |
| 羅州 伏岩里3号墳 | | | | | | | | ○? | | | |

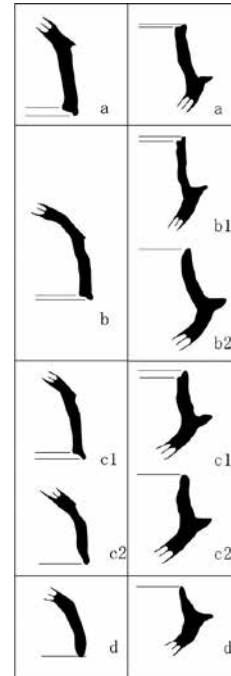
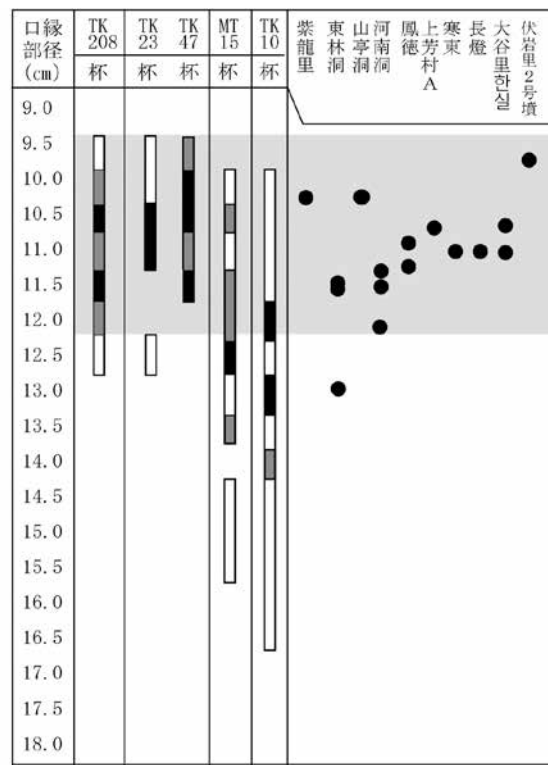
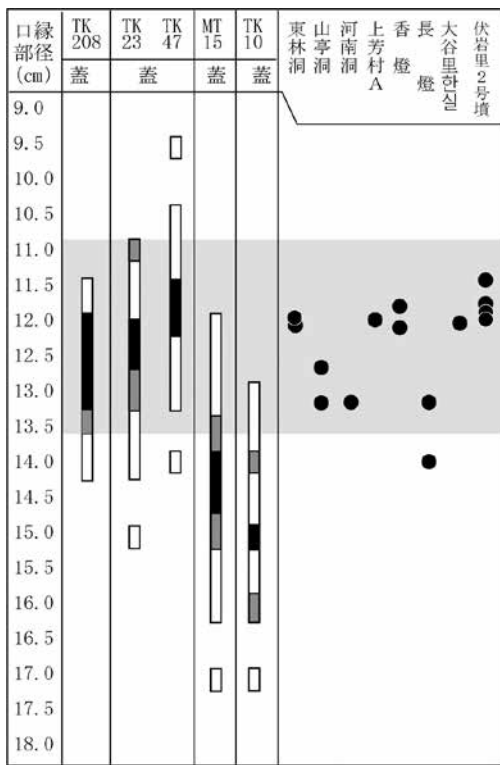


図4 杯蓋, 杯身の口縁部分類 (北山 2007)



田辺1966に基づき作成。長方形の範囲は窯から出土した杯身・蓋のサイズ。
長方形のうち、灰色の範囲は10%以上、黒色は20%以上資料数がある。

図5 陶邑窯における杯身・杯蓋の法量変化と全羅道出土須恵器のサイズ

た可能性が高いと考える資料であるが、類例として大阪府・濁り池窯、同・長原遺跡 SK705 (図 6-37)、奈良県・布留遺跡土坑 2 (図 6-38) があり、共伴する土器資料から TK73 期に位置づけられる。長原例は韓式系軟質土器の定着過程を示す土器資料と共伴し、布留例は鳥足文を有する鍋形土器が伴い、併行関係を探る上で良質の資料となる。潭陽・城山里 4 號住居址杯身 (図 6-2) も在地産であるが、TK73～216 期に類例がある (図 6-39・40)。当資料は徐賢珠によって百済の影響によると考えられているが [徐賢珠 2006]、須恵器の杯身は TK73 期の前半 (ON231 段階) に出現し、百済・全羅南道との関わりをあらわすと理解されている [酒井 1994・2004]。この詳細な系譜については、さらなる検討が必要であるが、百済から全羅道地域、倭に向けて、新食器の共有を考えたい。

5 世紀後半には、須恵器の杯身・杯蓋が全羅道地域に増加する (表 2, 図 5)。TK208 型式と TK23・47 型式の差異をまとめると、TK208 型式の蓋杯は口縁部径が 12.0～13.5cm (杯蓋)、10.0～12.0cm (杯身) を中心とし、扁平で天井部および底部の広範囲に回転ケズリを施すが、TK23・47 型式では口縁部が 11.5～13.0cm (杯蓋)、9.5～11.5cm (杯身) とやや縮小し、天井部および底部が丸みをおび、回転削りの範囲は 1/3 と狭くなる。以上の型式比定によると、栄山江流域の須恵器杯身・杯蓋は、TK23・47 期に最も出土数が多くなる。

また、須恵器系杯身・杯蓋も同様に、TK23・47 期に最も増加する。須恵器系杯蓋は、須恵器との差異を列挙すると、①天井部の稜線付近を削り、②天井部や底部に回転削りを施さず、横方向の手持ち削り (東林洞例) やナデ (鳳徳例、長燈例) で仕上げ、③須恵器の器形に対し、口縁部形状が異なる。とりわけ①の点は重要であり、須恵器生産は丸底原形を基礎とするが、全羅道地域の土器生産は平底原形であるために、底部と体部の境となる部位の粘土が厚くなり、この部分に削り工程が必要となったと考えられる。こうした基層的な土器作りの差異は、製作者の問題を考える手がかりとなる。須恵器系土器の製作者は須恵器工人が栄山江流域に渡来し、変容した可能性と在来陶工が須恵器を模倣した可能性の 2 つが考えられるが、後者であると推察したい。しかしながら、栄山江流域で製作された須恵器系土器は、岡山県天狗山古墳、熊本県江田船山古墳と日本列島の古墳でも出土しており、一方向的な流れではないことには留意したい。

6 世紀になると、MT15 期から TK10 期の須恵器杯身・杯蓋は減少するが、栄山江流域と倭において蓋杯の口径が大きくなるといった変化が連動する。

甕の型式 全羅道地域にみられる須恵器の甕を時期比定すると、下記のようにまとめることができる。

TK73 期～216 期：羅州・佳興里古墳、務安・徳巖 1 号墳 4 号甕棺

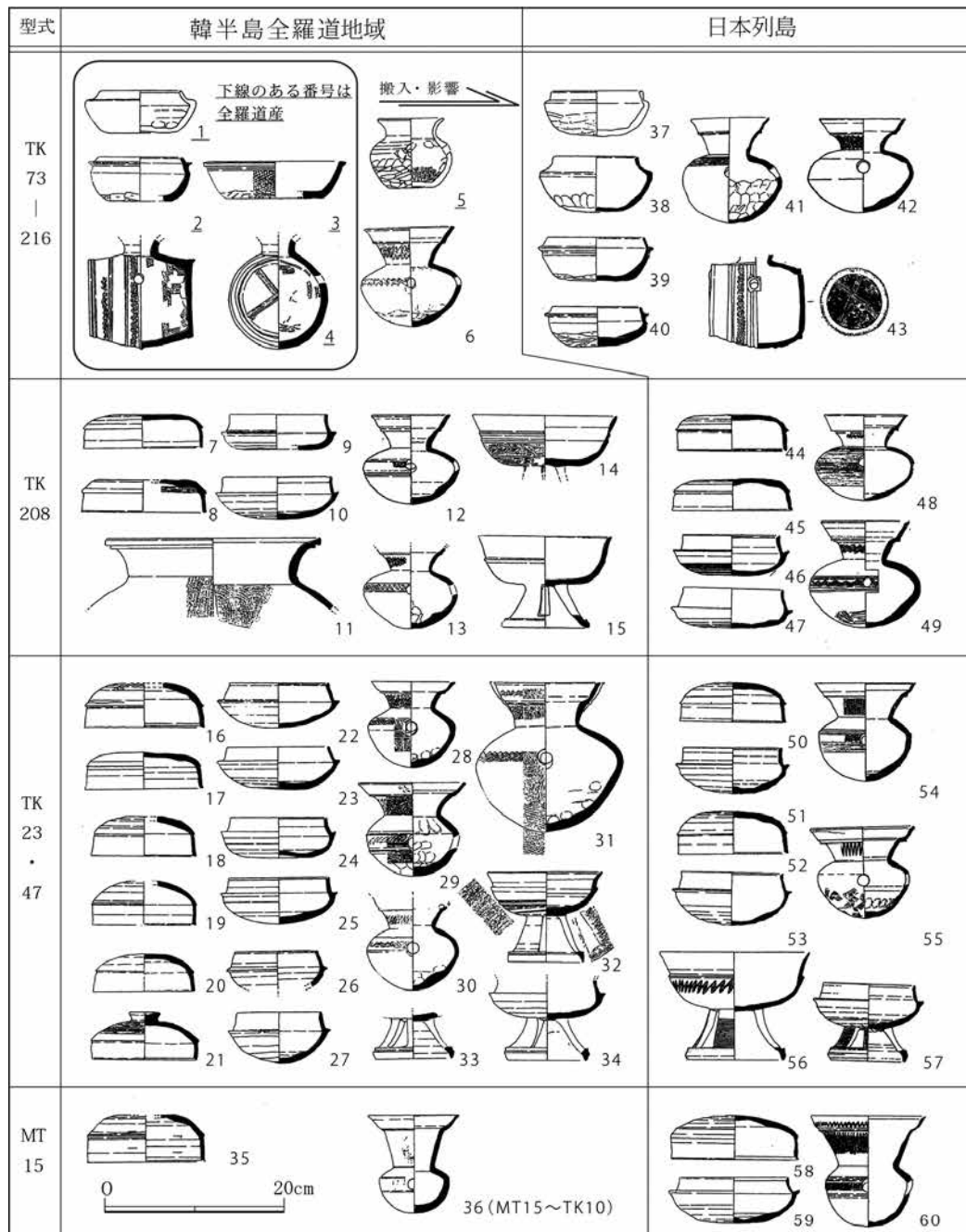
TK208 期：務安・麥浦里墓壙 262 採集、光州・山亭洞 16 号溝、和順・月谷里墓壙 17 採集

TK208～23 期：高敞・紫龍里 3 号墳西周溝、務安・徳巖 1 号墳 7 号甕棺、務安・上馬里上馬亭古墳甕棺周辺

TK23・47 期：高敞・紫龍里 2 号墳 7-1 号土壙墓、6 号墳 1 号土壙墓、4 号墳 1 号土壙墓、高敞・鳳徳方形推定古墳、長城・大德里 1 号石槨、順天出土地不明 (?)

MT15 期：羅州・伏岩里 3 号墳 96 石室、伏岩里 1 号墳

なお、大德里 1 号石槨例 (図 6-29) については、胴部に凸線がめぐり、在地産の可能性もあるが、TK23・47 期の群馬県・井出二子山古墳、奈良県・新沢 166 号墳、福岡県・番塚古墳などに類例が



韓半島全羅道出土

1. 東林洞 101 号溝
2. 城山里 4 号住居
3. 河南洞 4 号溝
4. 長燈 8 号竪穴
5. 河南洞 100 号住居
6. 徳巖 1 号墳 4 号甕棺
7. 河南洞 9 号溝
8. 東林洞 140 号溝
9. 山亭洞 8 号方形建物
10. 河南洞 9 号溝
11. 東林洞 71 号溝
12. 麥浦里墓坑 262 採集
13. 山亭洞 16 号溝
14. 東林洞 19 号溝

15. 上芳村 A6 号住居
16. 長燈 3 号墳
17. 山亭洞 9 号方形建物
18. 東林洞 60 号溝
19. 香嶺 15 号住居
- 20・21. 伏岩里 2 号墳
22. 大谷里한실 A-1 住居
23. 伏岩里 3 号墳
24. 鳳徳方形推定古墳
25. 鳳徳方形推定古墳
26. 長燈 2 号墳
27. 伏岩里 2 号墳
28. 紫龍里 6 号墳 1 号土坑墓
29. 大德里 1 号石槨
30. 紫龍里 4 号墳

31. 紫龍里 2 号墳 7-1 号
 32. 西玉 3 号墳
 33. 山亭洞 2 号溝
 34. 山亭洞 9 号方形建物
 35. 長燈 6 号墳
 36. 伏岩里 3 号墳 96 石室
- 日本列島出土**
37. 大阪 長原 SK705
 38. 奈良 布留土坑 2
 39. 大阪 長原 SX013
 40. 大阪 長原土器群 A
 41. 大阪 TK85 窯
 42. 大阪 TK216 窯
 43. 大阪 薮屋北大溝
 44. 大阪 長原 150 号墳

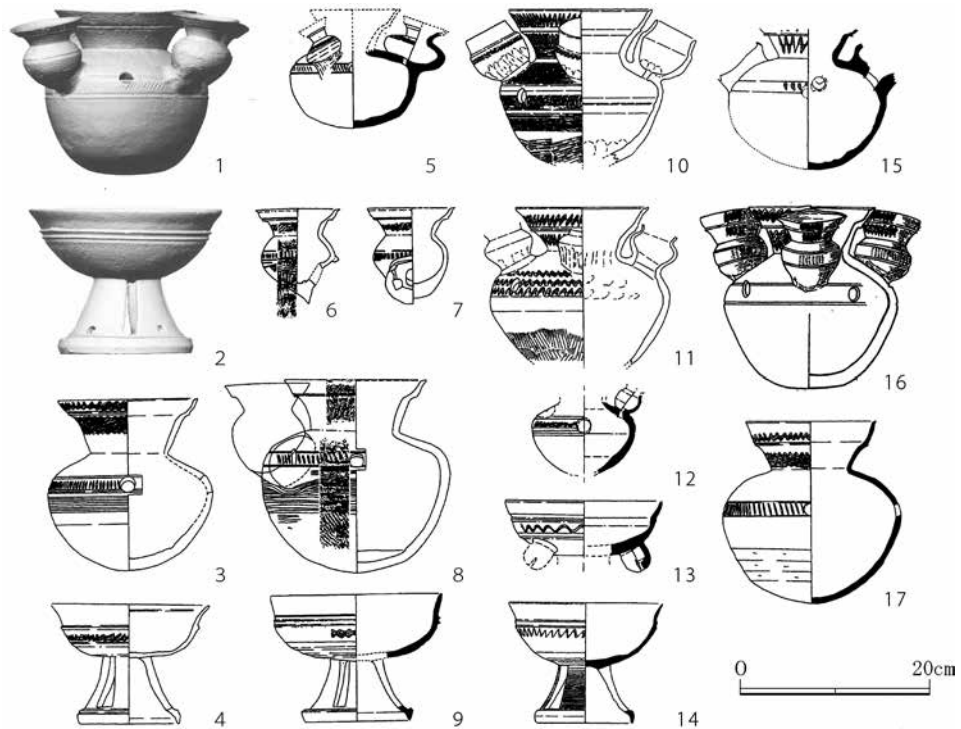
45. 香川 川上古墳
46. 大阪 長原 150 号墳
47. 香川 川上古墳
48. 大阪 TK208 号窯
49. 鹿児島 南摺ヶ浜
50. 大阪 TK23 号窯
51. 大阪 長原 SK701
52. 大阪 長原 SK12
53. 大阪 長原 SK12
54. 大阪 TK23 号窯
55. 埼玉 稲荷山古墳
56. 大阪 鬼虎川大溝
57. 埼玉 稲荷山古墳
- 58・59. 大阪 MT15 窯
60. 大阪 神山丑神 6 号墳

図6 全羅道出土須恵器の編年試案(中久保 2017 に一部加筆)

あることから、須恵器の可能性もある。

子持甕 須恵器は、これまで定型化という「朝鮮陶質土器の系譜をひきながらも、ようやく須恵器としての固有の性格と特徴を持つようになった」[田辺 1981 : p.40] という考えを基本に、須恵器の型式変化が捉えられてきた。もちろん、須恵器生産の中心地である陶邑窯跡群内で引き起こされた技術・形態・意匠上の内的な変化、たとえば高杯にみる低脚化や透窓の減少、甕の小型化に、機能や製作のしやすさ、破損や焼けひずみのリスク低下といった堅実・便利・簡単な生産への移行を読み取る見解は、肝要である[福田 2006]。しかしながら、甕や壺、杯身・杯蓋、有蓋高杯といった主要器種には、たしかに生産の効率化が読み取れるものの、新たに出現する器種や意匠に目を向ければ、定型化が進んだ須恵器についても、外的要素の受容と変容を看取できる。

例えば、装飾須恵器の出現期を代表する型式である子持甕は、TK208 期から TK23・47 期に多く類例が認められるが、その出現背景はこれまで不明であった(図 7)。しかしながら、近年、韓半島南西部の高敞・鳳徳 1 号墳 4 号石槨から子持有孔広口小壺が出土したことにより、再検討の余地が広がった器種である。鳳徳 1 号墳 4 号石槨から出土した子持有孔広口小壺(図 7-1)は、平底気味の底部、胴部にめぐる割り付け凸線から在地産であると考えられる。日本列島では、大型甕と無蓋高杯が組合わさるセットとして初期の横穴式石室を埋葬施設とする佐賀県久保泉丸山 ST004 古墳例(図 7-3・4)があり、子持甕は TK208～TK23・47 期に多く類例がある(図 7)。鳳徳 1 号墳 4 号石槨例も同じく TK208～TK23 期に位置付けることが可能である。



1・2. 高敞 鳳徳 1 号墳 4 号石槨 9. 大阪 TK23 号窯 14. 大阪 鬼虎川遺跡
 3・4. 佐賀 久保泉丸山 ST004 古墳 10. 三重 石薬師 74 号墳 15. 大阪 野々井南 4 号墳
 5. 三重 神前山 1 号墳 11. 三重 石薬師 67 号墳 16. 福岡 羽根戸
 6～8. 鳥根 増福寺 20 号墳 12・13. 京都 安井北 2 号墳 17. 大阪 寛弘寺 29-2 号

図 7 須恵器・子持甕の諸例(中久保 2017 に一部加筆)

興味深いことに、大型甕の量産や子持甕の出現はTK208期をもってはじまり、ほぼ同時に全羅道地域と日本列島各地に点的ながらも広がりを見せる。山田邦和の研究を参考とすると、子持甕は装飾須恵器の出現期を代表する型式であり、三重県・神前山古墳にみられるように鳥形甕も同時に出現する〔山田1998〕。5世紀前半における須恵器にはこうした意匠がみられないため、定型化といった言葉で表現されてきた内在的な変化のみならず、外的な意匠導入を再評価したい。視野を広げれば、中国福州桐口村六朝墓出土五連罐（東晋代）など、中国陶磁との意匠的關係性も今後追及しなければならぬだろう。⁽³⁾

以上、全羅道地域における須恵器の様相をまとめると、土器の器種構成などに選択性が看取できるが、5世紀前葉以降に双方向的な交流が顕在化することが土器資料によって可能であるといえよう。また、全羅道において5世紀後半に増加する須恵器系土器についても須恵器との差異を見出すことができるが、一方で日本列島内においても東日本や九州において須恵器模倣土師器が展開し、その地域独自の変容が顕著である点にも留意が必要である。相互交流を認めながらも、地域独自の変容もここで指摘しておきたい。

③……………日本列島・近畿地域における土器、集落、小規模古墳の動態

土器を通じてみてきた5世紀代の日韓相互交流がもたらした影響を考える上で、次に日本列島・近畿地域に視線を向けて、倭人社会が韓半島系渡来集団を受け入れた過程を土器資料をもとに論じ、そのうえで集落、手工業生産遺跡、そして、古墳にみられる変化から追及したい。

韓式系軟質土器の定義と研究の課題 5世紀代を中心として、近畿地域では「韓式土器」「赤焼土器」「朝鮮系軟質土器」など研究者によって様々な呼称があるが、一般には「韓式系土器」と呼ばれることが多い韓半島南部に由来する土器が多く出土する。この種の土器については、1960年代に早くも「漢韓系式土器」などと呼称され、土器の由来が東アジアの広域に求められていたが、1985年の韓式系土器研究会の発足によって、以後、分布と系譜に関する研究がいちじるしく伸長した。現在、韓式系軟質土器の系譜は多くが百済・馬韓もしくは加耶西部に求められ、少数派ながらも加耶東部や新羅に系譜をもつものがあることが判明している〔酒井1998、田中清2005、寺井2016など〕。将来的には、韓国内における軟質土器の地域色解明と連動して、錦江流域系平底鉢や栄山江流域系甕とさらなる系譜の特定が可能となると見込まれるが、口縁部形状などに着目すれば、近畿地域で変容したものも含まれており、韓半島における軟質土器に製作技術系統が連なるという意味において韓式系軟質土器という総称は一定の意味を持つ。

いわゆる「韓式系土器」とは、当初は「朝鮮半島からもたらされた土器、あるいはその影響下で渡来人および在地の者が日本で製作し、彼地の土器の諸特徴を如実に表す総称」と定義された〔植野1987〕。しかし、研究が進むにつれて、この定義の中には様々な性質の土器が含まれることが明らかとなり、最近では「韓式系軟質土器とは器形や製作技法が三国時代の韓半島南部地域にみられる赤褐色軟質土器に酷似したもので、長胴甕、小型平底鉢、甕、鍋など、日常の調理に用いられた器種を主体とする土器群」と、軟質の土器に限定して用いることが一般的になりつつある〔田中清2005、本稿では「韓式系軟質土器」と呼称する〕。

韓式系軟質土器をめぐる、研究者や発掘調査担当者によってその分布の解釈が異なることは、この種の土器に関する評価を難しくしている問題点の1つである[中野2008, 中久保2009]。たとえば、韓式系軟質土器の出土量が少ない地域では、出現期の須恵器なども含めて「韓式系土器」と呼び、渡来人の存在を決定付ける傾向にある一方、出土量豊富な近畿地域にあっては土器の硬軟を区別し、セット関係を重視して渡来人が居住した集落を限定する方向に向かった[今津1994, 富山2005, 中野2008]。少数の土器資料をもって、渡来人の居住と看做すのか、それとも証拠不十分とするのかといった解釈は、厳密には多くの困難を伴う。そこで亀田修一が実践したように、様々な考古資料を動員した上で渡来人の居住を吟味する作業が求められる[亀田1993・2012]。

ただし、従来、着目されてきた製作技術に加えて、土器使用の側面を明らかにしておくことは、容易に変えがたい生活習慣が土器に付着すると考えられるため、渡来した集団の居住を探ってゆく上で有益である。このことを念頭に置いた上で、韓式系軟質土器を在来の土師器と比較しつつ、その差異をまとめたい。

韓式系軟質土器の器種構成と折衷土器 韓式系軟質土器の器種には、小型平底鉢(図8-1・2)、甑(図8-3)、長胴甕(図8-4)、鍋(図8-5)、把手付鉢、平底鉢、羽釜、移動式カマド、直口鉢(鏡)、U字形カマド枠などがある。以上のなかで主な器種は小型平底鉢、長胴甕、鍋、甑といった煮炊器であり、煮炊あるいは貯蔵の用途が推測できる平底鉢、供膳器としての把手付鉢、カマド付属具であるU字形カマド枠は出土例が少なく、近畿地域において多量の韓式系軟質土器が出土する遺跡で限定的にみられる。直口鉢は脚台を有する煮炊器であり、東北アジアに起源が求められる鉄あるいは金属製鏡を模倣した可能性があるが、大阪府溝咋遺跡、長原遺跡、大庭寺遺跡、伏尾遺跡に例がある。

韓式系軟質土器は、土器外表面に格子文、縄蓆文、平行文、鳥足文などのタタキ目がみられ、基本的にハケ調整によって器面を整える在来の土師器とは、破片資料でも区別可能である。さらに、韓式系軟質土器と日本列島在来の土師器は、それぞれの属性において製作技術上の差異が認められ、土器製作の技術体系そのものが大きく異なる[田中清2005, 中久保2009・2013]。同様に、土器外表面にスス等の付着が観察できる煮炊用土器の種類、サイズの構成にも差異があり、このことは調理の施設と内容の差異が背景にあると推定できる[大庭・杉山・中久保2006, 中久保2009, 中野2012・2013]。

具体的には、韓式系軟質土器はカマドにかける長胴甕・鍋、蒸す調理に用いられる甑、地床炉やカマド前面に直置きされた小型平底鉢と、調理施設や目的に応じて器種が分化している[大庭・杉山・中久保2006: 図8上段]。また、カマドにかけられた長胴甕と鍋においても、内面にコゲが付着しない湯沸し専用器である長胴甕と、コゲが付着する鍋とでは調理内容・方法の違いがある。一方、近畿地域在来の土師器煮炊器は、球胴を呈する布留式甕のみによって構成され、土器の内面を観察すると、コゲが付着することが多く、蒸す調理の専用器はない。炉に設置され、中・大型は炊飯、中・小型は煮る、炊く、温めると調理内容によって、同形を呈する球胴甕のサイズが選択される(図8下段)。したがって、韓式系軟質土器のように器形による機能の分化が著しくはない。

ただし、5世紀の近畿地域においてカマドが普及するとともに、在来の煮炊器にも変化が認められることは、土器から集団関係を復元する作業上において吟味が必要となるために、ここでその

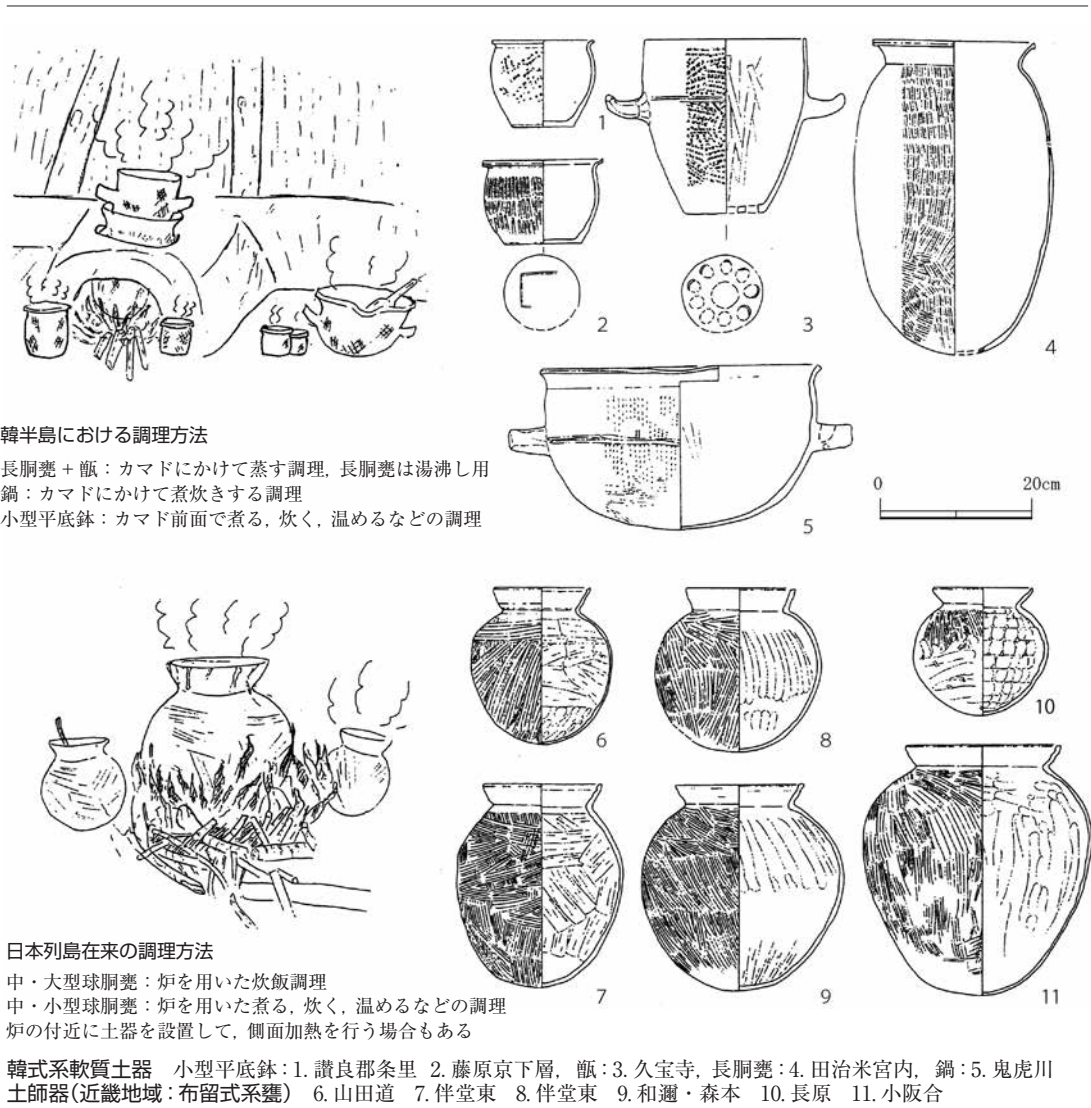


図8 韓式系軟質土器と布留式系甗の比較（中久保2017に一部加筆）

あり方を注意しておきたい。須恵器型式でいうTK73～TK216期に近畿地域の球胴甕は大型化する。ここでいう大型とは、器高25cm～30cmのものを指し、容量は6～8ℓ前後を量る（図8-7・9）。中には、器高30cmを越えるものも存在する（図8-11）。古墳前期の布留式甗は、大きいものでも器高24、25cmであることをふまえると、長胴化が進んでいる。しかし、器高35cm前後、容量12ℓ前後を湛える韓式系軟質土器の長胴甕（図8-4）と比べると、内容量は異なる。さらに、大型の球胴甕はカマドに伴う例があるものの、使用痕跡をみるとコゲが付着しているなど、在来的な色彩が強い〔中久保2008〕。

一方、大阪府・長原遺跡など近畿地域の限られた遺跡では、韓式系軟質土器の器形を有しながらも、土師器に共有されている製作手法を用いた土器も存在する。筆者は、こうした折衷土器を定着型軟質土器と呼び分け、韓式系軟質土器が受容されてゆく過程として位置づけた〔中久保2009〕。韓式系軟質土器の出土に韓半島から渡来した集団の移住を認めた場合、この定着型軟質土器は、韓

式系軟質土器から、その背後に韓半島より渡来した集団の世代交代、あるいは渡来した集団と在来集団の婚姻や親睦の痕跡として評価できる蓋然性が高いため、筆者は渡来系集団と在来の集団の密接な関係がうかがえる土器群として評価する。なお、陶邑窯跡群・大庭寺遺跡では、還元焰焼成の平底鉢、長胴甕、甌、鍋などが出土しており、須恵器生産の中で煮炊器が生産されていることも付記しておきたい [中久保 2010]。

河内湖周辺における韓式系軟質土器の濃密分布 近年の集成作業 [古代学研究会 2012] によって、5世紀において、近畿地域を中心に韓式系軟質土器の出土遺跡は、少なくとも 315 遺跡を越すことが確実視できるようになってきた。しかし、韓式系軟質土器は、近畿一円、均等に出土するのではなく、その分布には小地域単位の粗密を見出せる。

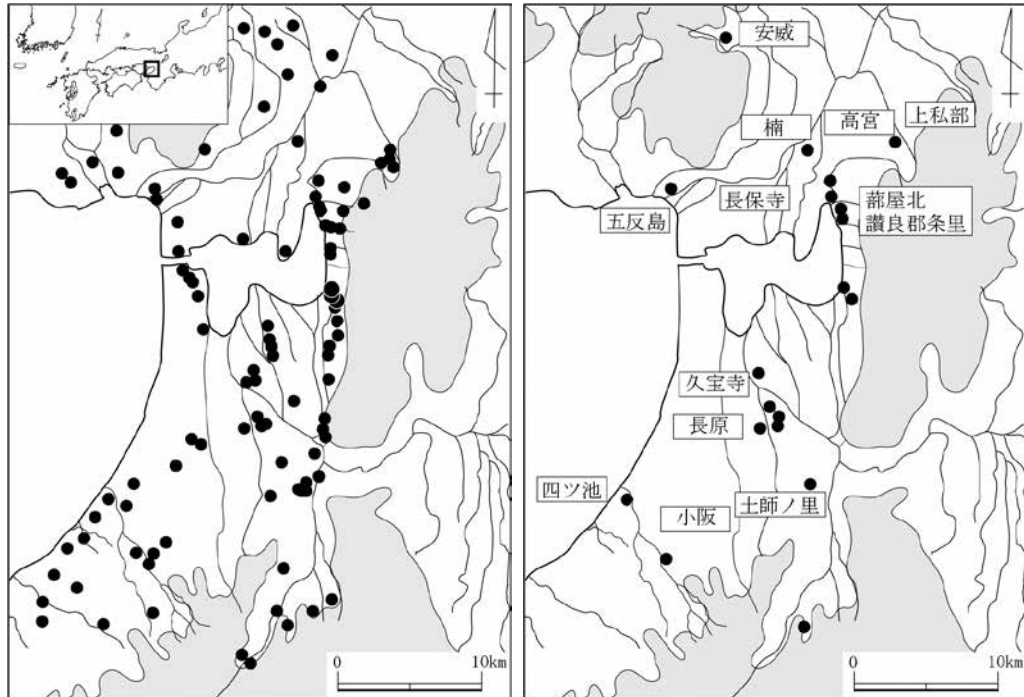
このなかで、韓式系軟質土器の分布が最も濃密であるのは、河内湖周辺を中心とする大阪湾岸であり、次いで奈良盆地が多い。⁽⁴⁾さらに河内湖周辺では、長原遺跡群を代表として TK73~216 期に定着型軟質土器（長胴甕、小型平底鉢、甌、鍋）が主体となる集落が認められ、こうした限定的な集落において在来と外来の煮炊器がすみやかに融合する過程を追うことができる [中久保 2009・2013]。

そして、韓式系軟質土器と定着型軟質土器にみる韓半島系渡来集団の移住と定着は、手工業生産遺跡の分布とも密接に関連している (図9)。図9は、大阪湾沿岸における韓式系軟質土器出土遺跡(左上)、定着型平底鉢・長胴甕出土遺跡(右上)、鍛冶関連遺物・遺構(左下)、主要手工業生産工房(右下)の分布を示したものであるが、韓式系軟質土器の出土遺跡が集中し、定着型平底鉢や長胴甕の分布が認められるところに、鍛冶関係遺物や遺構が検出されていることを確認できる。代表的な遺跡として大阪市から八尾市にまたがる長原遺跡群(長原遺跡、瓜破遺跡、城山遺跡)、久宝寺遺跡、大園遺跡、生駒西麓遺跡群(西ノ辻遺跡、鬼虎川遺跡、神並遺跡)、葦屋北遺跡・讃良郡条里遺跡群をあげたい。そして、そこでは鍛冶関係だけではなく、馬飼や玉作、紡織や木工といった各種の手工業生産の痕跡を見出すことができる。このことは、韓半島との人的交流が幾重にもわたること、そして、交流の内容が交易のみならず技術や知識の導入を意図したものであることを示すと考えられる [中久保 2012・2017]。

手工業生産遺跡の展開 この議論を深めるため、手工業生産遺跡に関する研究状況もまとめておきたい。

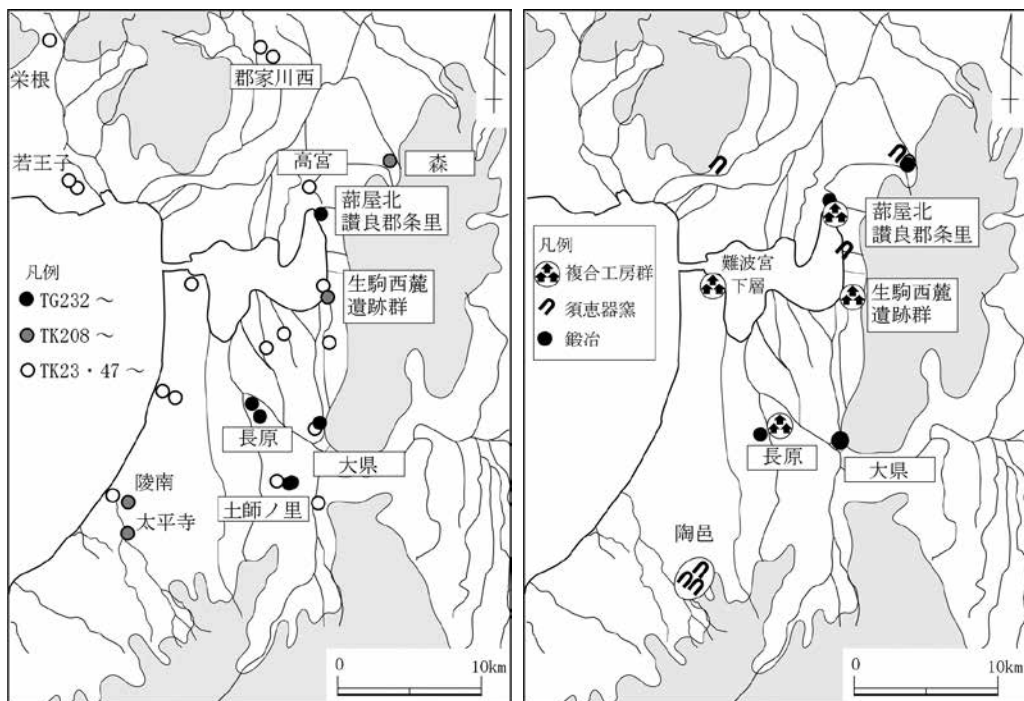
近畿地域中央部においては、5世紀代に大阪府大県遺跡(鍛冶)、大阪府南部泉北丘陵一帯に広がる陶邑窯跡群(窯業)、奈良県曾我遺跡(玉作)、大阪府奈良井遺跡、葦屋北遺跡・讃良郡条里遺跡(馬飼)、和歌山県西庄遺跡(製塩)など、特定の手工業生産を担った「専門的生産拠点」が成立する。和田晴吾は各種の特定工房が畿内一円に分散し、それぞれの工房が限定された製品を生産している点を評価する [和田 2003・2004]。さらに菱田哲郎は「畿内」における手工業拠点の配置に計画性を読み取り、領域に対する一定の支配権が確立していたと読み解いた [菱田 2007]。

専門的生産拠点に加え、各種製品を生産する「複合工房群」に関する研究も着実な成果をあげてきた。鉄滓・鞆羽口などの出土量および操業時期をもとに鍛冶工房を分類した花田勝広の研究 [花田 1989] を発展させた堀田啓一は、鍛冶と他の手工業生産の関係性から「大和の場合、鍛冶工房集落では他の生産工房と併存する遺跡例が多いが、河内例では単一製品工房であり、大王陵群内に含



韓式系軟質土器出土遺跡

定着型平底鉢・長胴甕の出土遺跡



鍛冶関連遺物・遺構出土遺跡の分布
(花田2002をもとに作成)

手工業生産工房の配置

図9 韓式系軟質土器の分布と手工業生産遺跡の展開 (中久保 2017 に一部加筆)

まれる集落で工房を保有する(和泉を含めて)ことが多い」[堀田1993: pp.155-156]と地域差を指摘し、その要因を渡来人の存在形態に求めた。

堀田の着想は、その後、奈良県・南郷遺跡群の発掘調査成果により、豪族膝下の複合工房として肉付けられるようになった。南郷遺跡群と布留遺跡の分析を通じて鍛冶集団の差異を実証した坂靖は、前者に葛城氏、後者に物部氏を結び付けて理解し、豪族が個々に個別の技術者集団をその麾下においていたと主張する[坂2009]。青柳泰介は、南郷遺跡群を経営した「カツラギ」氏は渡来人を積極的に活用したのに対し、奈良盆地中央部に拠点をおく「ワニ」氏はそうではなかったと、豪族の開発方式にも差異があることを推測する[青柳2005・2014]。こうした成果を吸収した田中史生は、「大和の工房が王権を支える豪族の家産に組み込まれていたものであったのに対し、河内の工房は王権の工房として再編されたものであった」と、複合工房群と専門的生産拠点の経営主体の違いを対比的にまとめた[田中史2005: pp.121-122]。

ただし、2000年代以降の発掘調査によって、複合工房群と専門的生産拠点にみられる地域差に関しても再検討の必要性が生じてきた。そして、手工業生産拠点は、その生産域および居住域と小規模墳が近在してみられることも明瞭になってきている。

「初期群集墳」をめぐって 日本列島において古墳の存在形態には、1基単独で立地する単独墳、大小含む古墳が群をなす古墳群、小規模墳が数十基～数百基群在する群集墳等がある。このうち群集墳については、6世紀以降に爆発的な増加をみるのが通説であり、この現象を古い共同体の分解とともに出現した家父長的首長層の墳墓とみる近藤義郎の議論[近藤1952]と、古墳を身分表示として理解し、家父長的家族層に至るまで身分秩序に組み込まれたと考える西嶋定生説[西嶋1961]を代表として研究が蓄積されてきた[右島2012]。

しかし、古墳編年研究の精緻化と充実した資料数増加に伴い、群在する小規模な古墳は6世紀をさかのぼる事例が鮮明となる。奈良県・石光山古墳群を主対象として、こうした群小墳を初期群集墳として着目した白石太一郎は、その出現契機を共同体を解体することなく、5世紀後半から6世紀にかけて生産力の著しい発展を基礎として新しく台頭してきた中小共同体の首長層や有力成員層を、ヤマト政権が直接その支配秩序に組み込もうとしたものであると考えた[白石1976]。一方、和田晴吾は古墳時代小型墳墓を5類に分類し、c類(木棺直葬のほかにも多様な埋葬施設をもつ円墳。小型低方墳の円墳化したもの)からなる古式群集墳の出現を須恵器型式でいうTK23・47期に求め、この時期を古墳時代後期の開始期としてヤマト政権による有力家長層の直接的な掌握を読み取ろうとする[和田1992・2003]。

このなかで、「当時の共同体秩序からはみだしている」と考えられうる渡来人の掌握が群集墳形成の1つの契機となったと推測する和田の議論は、いまなお有効な視座である[和田1992]。しかしながら、この指摘以降に、①韓式系軟質土器にかんする実態把握が顕著な前進をみたこと、②古式群集墳に先行する大阪府・長原古墳群などの事例が例外的ではなくなってきたことは、小古墳群をめぐってあらためて議論を要する点であると考えられる(図10)。そして、初期の群集墳は集落遺跡に隣接し、さらにその盛行期が5世紀代、大阪平野に築造された古市・百舌鳥古墳群中の陪冢と同調的な展開を示すことが明確となってきた[中久保2014]。以下では、この点を河内湖周辺、奈良盆地南部、大阪湾沿岸の事例を挙げて、吟味したい。

長原遺跡群と長原古墳群 長原遺跡群は、豊富な陶質土器、初期須恵器、韓式系軟質土器とともに鍛冶、漆工芸、玉作、馬匹生産、紡織に関連する遺物が出土し、渡来系集団を積極的に受け入れ、河内湖南岸に配置された複合工房群を擁する5世紀代の集落として評価できる〔田中清2005、中久保2013〕。そして、この集落内部に展開する長原古墳群を構成する小規模な古墳が、現在219基確認されている。

長原古墳群をめぐっては、原初的な「官僚」として評価する論説〔広瀬1984、岸本1989など〕、指揮官クラスを含む軍事組織化の拡充を示す資料として捉える意見〔豊島2010〕、中央政権による渡来系集団の直接的掌握と考える見解〔寺沢1985〕、弥生時代以来の連続性を主張する議論〔石部1980〕、居住集団の自立的な造墓活動とみる考え〔京嶋1997〕など、様々な評価が下されてきた。

これまでの調査成果をまとめると〔櫻井2001、寺井ほか2006、大庭2006〕、長原遺跡では弥生時代以降方形周溝墓が築造されているが、4世紀前葉～中葉には造墓活動は停止しているため、長原古墳群の出現は4世紀後葉（布留3式期）に築かれた長原1号墳（塚ノ本古墳）、85号墳（一ヶ塚古墳）を嚆矢として理解できる。続くTG232期に長原170号墳（高廻り2号墳）などが築造されるが、TK73期以降に質的な変化があり、墳長一辺15m以下の方墳数が増大し、TK23・47期にいたるまで築造された。これらの方墳には、規格的な小形円筒埴輪や形象埴輪の樹立がみられ、須恵器の豊富な供献が認められるほか、城山支群・長原167号墳（城山5号墳）では、主体部に須恵器壺と土師器甕が土器棺として利用され、また塚ノ本支群では韓式系軟質土器の鍋を供献する長原14号墳、一ヶ塚支群には須恵器大甕を土器棺として用いている長原87、180号墳が存在する。さらに周溝に韓式系軟質土器の鍋、樽形甕と出現期の杯身・杯蓋などの初期須恵器を供献する166号墳など、例外的に韓式系軟質土器が出土することも、渡来系集団との関連性を想起させる。ただし、古墳被葬者に関しては、集落域の土器相からみえる集団関係より復元すると、定着した渡来系集団、それが在来の集団と融合し出現した新集団の墓域と理解したい。

長原古墳群の終焉時期は、横穴式石室を導入した南口古墳（6世紀初頭；MT15期）築造以降であり、この時期を最後に築造が止む。そして、集落そのものもMT15期には衰退する。

河内湖周辺における集落展開と古墳群 長原遺跡群にみる5世紀に盛行する新興集落と初期群集墳の関連性は、河内湖周辺に多く認められる。韓半島から渡来した技術者集団を積極的に登用した産業殖産は、河内湖南岸の長原遺跡群を代表として5世紀初頭を前後する時期にはじまり、5世紀中葉に生駒西麓（西ノ辻遺跡、神並遺跡、鬼虎川遺跡）および上町台地（難波宮下層遺跡）へ、5世紀後葉以降、北河内（部屋北・讃良郡条里遺跡、高宮遺跡、森遺跡）と河内湖をめぐるように南から北へ展開する〔中久保2013〕。

河内湖北岸の淀川下流域左岸において韓半島各地に由来する陶質土器、韓式系軟質土器が数多く出土した部屋北遺跡・讃良郡条里遺跡は、弥生時代以降営まれた集落遺跡であるが、遺構の密集度が大きく一変するのはTK208期であり、TK23・47期にかけて集落は盛期を迎える〔藤田2011〕。部屋北遺跡では、住居域と倉庫群、水利施設が溝によって区画されて配置されるあり方が復元されているが、これは韓国・忠清南道の燕岐・羅城里遺跡にみる集落構造とも類似する。さらに、部屋北遺跡では、馬1頭分の全身骨格、大量の製塩土器、馬具（轡・鞍・鐙）といった馬飼と関連する遺物のみならず、鉄滓、鞆羽口、刀装具未成品、鉄鏃、砥石、紡錘車、織機といった各種手工業

B131101・131250では、韓式系軟質土器が出土している。

生駒西麓遺跡群では、神並遺跡第5次調査落ち込み1からTK216～208型式の須恵器に伴って、鞆羽口、鉄滓、鍛冶炉壁の検出が報告され、小規模ながらも鍛冶が行われたことがわかる。神並遺跡に隣接する植附1号墳周溝より同時期の須恵器とともに、韓式系軟質土器、鉄滓、馬の上顎骨、製塩土器が出土している。植附1号墳は東西10m、南北12.4mを測る小規模方墳であることから、地域を統括する首長墓といえないが、古墳造営を許された者が当地域の開発に深く携わっていたことを示す資料である。

上町台地上に位置する難波宮の下層では、法円坂遺跡から検出された5世紀後半代の掘立柱建物群が著名であるが、このほかにもTK208期に該当する鞆羽口やガラス玉鑄型が出土しており、新発見の須恵器窯（上町谷1・2号窯）とあわせて考えると、複合的な生産がこの地でなされた可能性が高い。付近より埴輪が出土し、孝徳朝難波遷都にともなって破壊された古墳が存在することが指摘されている〔寺井2007〕。その時期は、4世紀末にさかのぼる可能性があるものの、主体は5世紀中頃から6世紀前半までであり、ここでも複合工房群に伴う初期群集墳の存在を推察できよう。

新沢千塚古墳群と橿原市域の遺跡 視線を奈良盆地南部に向けよう。約1.5km四方に広がる範囲に約600基もの古墳が築造された奈良県橿原市新沢千塚古墳群は、初期群集墳をめぐる研究史の中で常に注目を集めてきた古墳群である。新沢古墳群の出現は4世紀中葉に比定できる新沢500号墳を嚆矢とするものの、古墳群の大多数をなす木棺直葬を埋葬施設とする方墳および円墳の築造は5世紀中葉以降である。付近には5世紀前半の1辺98mを誇る方墳の榊山古墳、6世紀前半の鳥屋ミサンザイ古墳（前方後円／138m）が築造されているが、古墳数が増加する5世紀後半代には付近に大型前方後円墳が存在しない。豊島直博は新沢千塚古墳群から出土した武器・武具組成を吟味し、軍事組織の復元を試みた〔豊島2010〕。

この議論に加えて、橿原市域における集落遺跡の調査も進展をみせたことから、軍事的な側面以外から小規模古墳群の性格を考えることも可能になってきた。橿原市域では、玉製品の生産拠点となった曾我遺跡をはじめとして、小型把手付台付鉢や小型器台などの初期須恵器が出土した四条大田中遺跡、阿羅加耶系陶質土器が出土し、多量の製塩土器に加えて木器、鑄造鉄斧、織機具部材、鞆羽口、鉄滓等の手工業生産関連遺物を豊富に出土した新堂遺跡・東坊城遺跡、鍛冶関連遺物を出土した内膳・北八木遺跡が調査されている。これらの集落遺跡から出土する韓式系軟質土器の系譜は、百済・全羅道地域である。

こうした5世紀以降に展開する集落遺跡の近隣に、小規模な古墳群が築造されている。四条遺跡と四条古墳群、内膳・北八木遺跡と内膳古墳群、東坊城遺跡、新堂（西新堂）遺跡と曲川古墳群がその具体例であり、その出現時期はおおむね5世紀中葉とすることができる。集落との呼応関係が先にみた河内湖周辺における様相と類似しており、軍事組織拡充といった側面のみならず、手工業生産や地域開発といった実務を担った集団の墓域としても小規模古墳群は捉えられる可能性が浮上してきた。

総持寺古墳群 大阪北部、北摂山地から派生する舌状台地に展開する古墳群である。1km離れた地点に墳長226mを測る太田茶臼山古墳が築造され、その周囲には陪冢がめぐる。総持寺古墳群では1辺15mを前後する小規模方墳が43基、円墳が1基検出されており、規格的な円筒埴輪と

もにTK73期以降の須恵器が豊富に出土した〔小浜ほか2005〕。埴輪は高槻市新池埴輪窯で製作されたことが判明しており、太田茶臼山古墳の埴輪と共通する。一方で、須恵器は陶邑産の製品も認められるが、体部に波状文を施した杯身など北河内の地方窯製品も含まれている。

この総持寺古墳群の造営主体は、調査担当者の小浜成が指摘するように太田茶臼山古墳を盟主とする在地の集団を想定することが適切であろう。ただし、太田茶臼山古墳築造以後においても総持寺古墳群が継続して築造されている点には注意が必要である。築造契機には首長墳を介した古市古墳群造営勢力の間接的関与がみられるが、継続的な造墓活動にはより直接的な関与を想定できる。最近、総持寺遺跡において集落域の検出が進み、総持寺古墳群と同時期の集落開発も解明されてきた。

伏尾古墳群と陶邑の集落展開 須恵器生産の一大拠点である陶邑窯跡群においても、生産の拡充と組織化にともなって初期群集墳の築造が認められる(図11)。伏尾遺跡は、背後には高蔵地区の須恵器窯がひかえる立地にあり、開析谷をはさみ、北側には竪穴住居3棟、掘立柱建物31棟等が検出され、南側は方墳5基と墳形不明の小規模墳1基が確認され、その時期はTK216～208期に収まる。古墳群では形象埴輪に加え、2条3段ないし3条4段の規格的な小形円筒埴輪が検出され、1号墳(方/16m)には筒形器台、3号墳(方/14m)には大型把手付台付鉢、5号墳(方/10m)には有蓋大型鉢と、集落域に供給されない器種が出土した。

調査担当者の岡戸哲紀は、陶邑における集落展開を3段階に分けて捉え、渡来系工人を主体とする大庭寺遺跡の出現段階(TG232期)、小阪遺跡出現にみる倭系工人の須恵器生産への参画(TK73期)を経た第三段階(TK216期からTK208期)にあたる伏尾遺跡の出現に居住・生産・流通を包括した計画的な集落形成を読み解く〔岡戸1997〕。岡戸の研究を須恵器生産と絡めて論じた植野浩三は、須恵器生産の整備と組織化、ヤマト政権の政策的背景をもとにTK216期からTK208期の集落変化があると推定した〔植野2005〕。

こうした先行研究は、5世紀を前後とする時期にはじまる大規模須恵器生産において、5世紀中葉に質的な変化があったことを示すものである。そして、小規模方墳群の築造は中央政権による手工業生産の組織化と関連づけて理解されている点をおさえておきたい。

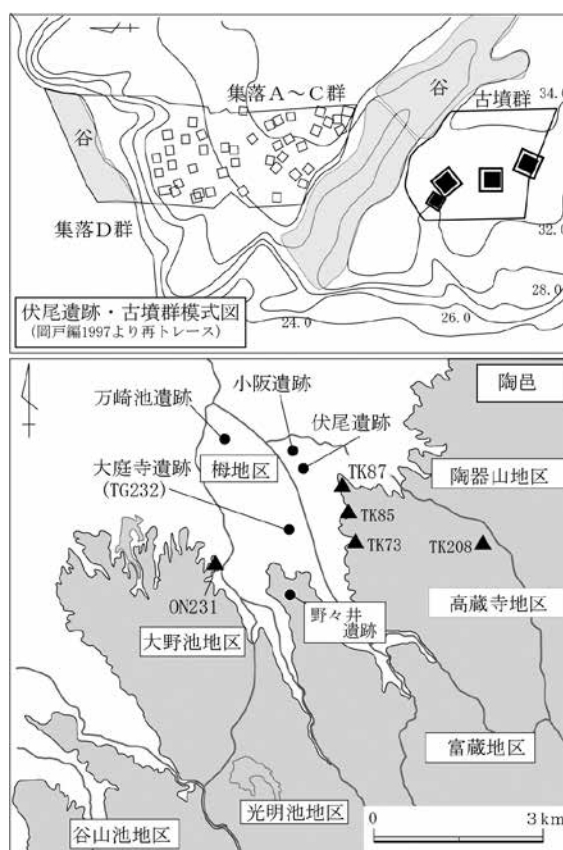


図11 伏尾遺跡・古墳群と陶邑窯跡群

猪名川流域における小古墳の築造 兵庫県南東部と大阪府北西部の府県境を南流する猪名川の流域には、前方後円墳および大型円墳を対象とした首長系譜分析が着実になされ、それに加えて小古墳の築造背景も論究されてきた〔森岡・吉村 1992, 福永 2004, 福永・中久保編 2015 など〕。

ここでは5世紀中葉から後葉にかけてみられる小古墳の築造動向と集落との関係に着目したい。寺前直人は、小古墳を墳丘長20m以下と定義した上で、待兼山古墳群、桜塚38号墳、小塚古墳など、TK216期～TK208期以降にこれら小古墳の築造が増加することを指摘する。その上で、豊中大塚古墳、御獅子塚古墳と大規模古墳を擁した桜塚古墳群における古墳規模縮小の一方で、待兼山古墳群にみられる小古墳の築造増加に、倭王権の新たな「支配」方式を読み説いた〔寺前 2001〕。また、清家章は、小形の円筒埴輪の分析をもとに長原古墳群との類似性を指摘し、埴輪祭祀の受容に大王権力の技術供与および製品供給を直接受けたと考える〔清家 2001〕。近年では長尾山丘陵や猪名野地域においても小古墳が発見され、表六甲地域の住吉宮町古墳群と同様、5世紀代の小規模古墳群はさらに増加すると見込まれる。

そして、2005年の調査において、直径14mを測る円墳の待兼山5号墳より韓式系軟質土器の破片が出土したことは、小古墳築造の背景を探る上で興味深い。当地域においては、豊中市上津島遺跡(TK208期主体)、利倉西遺跡(TK216期)、川西市栄根遺跡(TK208期)、尼崎市若王子遺跡など、TK216期～208期にかけて韓半島系土器を出土し、手工業生産関連遺物を有する集落が展開する。そして、5世紀後半にかけて展開するこれらの集落と小規模古墳群の関連性をここでも指摘できる。

黍田古墳群 以上にみるように5世紀代の小規模古墳群と新興集落は、その出現時期や位置関係において関連する可能性が高いが、一方で同時期でありながらも集落域が視認できないような立地にある古墳も存在する。兵庫県たつの市に所在する黍田古墳群は、5世紀中葉以降、7世紀に至るまで丘陵斜面に築造された古墳群であり、5世紀代に比定できる一辺10m前後の方墳は少なくとも14基が発見されている。播磨地域で生産された可能性が高い初期須恵器に加え、E号墳よりU字形刃先、曲刃鎌といった新式農具と有肩鉄斧、直刀、F号墳より短剣、直刀、サルボ、有肩鉄斧、U字形刃先、長頸鏃、耳環、刀子、多量の玉類など、最新の武器および農具、須恵器が出土した。その造営主体は当地域において豊富な韓半島系土器を出土したたつの市・竹万遺跡が候補となるが、両遺跡は目視できる関係にはない。ここでは、現在の発掘調査状況において、集落と隣接しない初期群集墳が存在することを指摘するにとどめたいが、同じような立地環境にある古墳群として、奈良県・南山古墳群も例示しておきたい。

小 結 以上、日本列島・近畿地域を対象に、韓式系軟質土器の器種構成と系譜をまとめることから始めて、その出土遺跡と手工業生産および初期群集墳の展開過程が関連していることを、いくつかの事例をあげて論じてきた。そして、韓式系軟質土器の主な系譜が百済・馬韓もしくは加耶西部に求められることは、この地域に倭系土器の増加現象や甕・有孔広口小壺の共有現象と重ね合わせると、相互交流を通じた作用として評価することが可能となろう。

ただし、韓式系軟質土器には、①少数派ながらも加耶東部や新羅に系譜を求められること、②初期須恵器にもこれらの地域の意匠や影響が認められることには注意したい。古墳副葬品の研究成果からも明らかであるように、韓半島各地や近畿地域の各小地域あるいは有力首長との多元的交流は確実視できる。ただ、これまで十分に着目されていなかった集落遺跡にみる新たな動きにも着目し

たい。人的交流を基礎とする手工業生産遺跡の増加やその内部構造にみる組織化の進展、それと呼応する新たな造墓集団の台頭は、5世紀における前代とはいささか異なった対外交流による社会変化として理解できるのである。

④……………5世紀後半から6世紀前半における日韓交流の展開

栄山江流域を中心とした全羅道地域と近畿地域における相互交流の実態について、あらためて比較し、そのうえで5世紀から6世紀への展開過程についても、予察となる部分が多いものの、展望を記したい。

今の議論において、全羅道地域の集落研究を精力的に推進してきた李暎澈の研究は、重要な論点を提示する[李暎澈 2016]。氏は、栄山江流域の社会が4世紀後葉以降に内的に発展し、5世紀後半には百済による在来社会への直接的関与によって、垂直的な階層・階級化の構造に変質したと読み解く。具体的には、光州・東林洞遺跡や山亭洞遺跡、河南洞遺跡にみる住居規模の格差増大、区画溝を有する住居の出現など、集落内部での階層化が顕著となり、住居区域と倉庫群、水利施設が計画的に配置される拠点集落が形成される。そして、こうした集落に韓半島各地の土器、倭系土器が出土するという指摘は、同時期に韓半島系土器を受け入れた近畿地域の集落と類似する点が多いことに気づく⁽⁵⁾。とりわけ栄山江流域における5世紀後半にみられる変化、すなわち集落の階層化および計画配置、そして地域支配、生産、交易、祭祀の拠点化は、近畿地域における手工業生産遺跡の計画配置やその内部での組織化と同調的といえる。ただし、栄山江流域においては百済による直接的関与が指摘されていることに対し、日本列島・近畿地域ではむしろ在地社会および主導政治権力による人的交流を介した新たな戦略のもとで進んだとみた方が良い点には留意が必要である。しかしながら、倭の主導政治勢力が、百済の直接的関与による栄山江流域の社会変化を間接的な情報収集あるいは直接的な人的交流によって知識として得た可能性は高い。

墓制に注目すれば、5世紀後半は全羅道地域の有力首長墳が在来の伝統を保持しつつも、韓半島各地との多面的な交渉があったことが明らかとなってきたが、高敞・鳳德里1号墳、霊巖・沃野里方形台形古墳、新村里9号墳にみるように、甕や有孔広口小壺の共有に加えて倭系の埴輪に影響を受けた円筒形土器が樹立されることは、倭との相互交流が反映したものとみることができる。また5世紀後葉から6世紀前葉においては、栄山江流域における前方後円墳の出現、威信財や横穴式石室受容にみる倭と百済中央の連携強化など、また新たな政治的变化も認められる[禹在柄 2014]。この点は6世紀前葉の日本列島各地において首長系譜が変動するといった政治変動と関連付けて理解する必要があるが[福永 2004, 朴天秀 2007]、近畿地域の集落や手工業においても5世紀後半と異なる動きがみられる。

須恵器の様式変化に関する再検討 MT15～TK10期にみる様式的変化についても、外的影響という側面から再検討の必要がある。

この時期の須恵器は、田辺昭三により「群集墳の被葬者層という新しい須恵器の需要者が広範に出現したことに支えられて、須恵器生産は最初の画期を迎えた」[田辺 1981 : p.48]と変化の要因が考えられているが、現在の資料からみれば、仮器化と群集墳の出現は時期的に一致しない。ここで

改めて注目したい点は、提瓶や短頸壺などのMT15期に増加する器種が、光州・月桂洞1号墳や海南・龍日里龍雲3号石室など、栄山江流域においても同時期に増加し、杯身・杯蓋の大型化、甕の長頸化といった型式変化も両地域で連動することである。須恵器では地域色発現に加え、装飾付器台の増加や角杯の部分的受容といった新羅からの影響も踏まえる必要があるものの、様式変化の背景に外的要因を見出せる資料状況になってきた。

近畿地域における手工業生産遺跡の変化 須恵器器種構成の変化を考える上で重要に思われる点は、窯業生産を含む手工業生産遺跡の分布が5世紀後葉から6世紀にかけて近畿地域内で変化することである。

陶邑窯跡群はMT15期に窯数が減少し〔大阪府教育委員会1980〕、一方、窯詰状態で良好な資料が検出されたMT15期の桜井谷2-2号窯に代表されるように、生産が活性化する〔福永ほか1991、陣内2013〕。窯分布の変化は近畿地域にとどまらず、TK23・47期に各地で展開した須恵器窯が衰退する一方、MT15期からTK10期にかけて兵庫県・金ヶ崎窯など新たな生産地が出現する現象とも連動する。

5世紀後葉の手工業生産遺跡が6世紀に必ずしも発展しないあり方は、窯業のみならず、鍛冶生産遺跡でも追認することができる。花田勝広によると「5世紀後葉に河内において集中するピークがあり、河内平野を中心に広く工房が散見される。一方、6世紀前半に引き続き、操業を行うものが少なくなり、特定工房（大県遺跡、森遺跡）への再編を予想せしめる」という〔花田2002:p.29〕。近年では、大阪北部の交野市・森遺跡群、兵庫南西部の尼崎市若王子遺跡を中心に鍛冶関連集落の実態が判明し、6世紀前半代における淀川ルート存在感が高まってきているが、分布の変化が認められるという点は花田の指摘を追認できる。さらに、集落内部における変化に目を向けると、大阪府交野市上私部遺跡が良質の事例である。図12で示すように5世紀前半から6世紀初頭に竪穴式住居で構成されていた集落が（上段）、6世紀初頭から6世紀中葉には、居住域拡大とともに方形区画にかこまれた大型の掘立柱建物群が出現し（中段）、短期間のうちにより計画的な建物配置へと変貌する過程が示されている（下段）。このあり方は7世紀前半まで継続することが判明しているが、この地域では葺屋北遺跡のように5世紀後半に画期が認められず、6世紀以降に展開することがいまの議論において重要である。いずれの地域も継体大王を擁立した政治勢力が基盤とした地域であるといえる。

同じく継体大王を支えた地域として捉えることができ、先に初期群集墳の展開過程において着目した猪名川流域において、継体期における古墳築造と集落動態を関連付けてみることによっても裏付けることができる。猪名川流域では、弥生時代大規模集落および古代寺院の分布も加味して、半径約10km圏内の地域を5つの小地域に分割して地域社会を復元し、古墳築造動向を探ることが可能であるが、6世紀前葉に古墳築造分布の変化を見出すことができ、この変化は典型的な横穴式石室を有する勝福寺古墳の出現、園田大塚山古墳など、継体大王擁立にともなう列島規模の政治変動と関連付けて理解できる〔福永2007〕。

古墳のみならず、集落側の動向からみても、6世紀では千里窯跡群の操業が活性化し、掘立柱建物が立ち並んでいた可能性が高い大阪府豊中市新免遺跡や須恵器の生産流通に関与していた同・本町遺跡などが勃興する一方、5世紀代の集落の多くは衰退する。勝福寺古墳が築造された小地域で

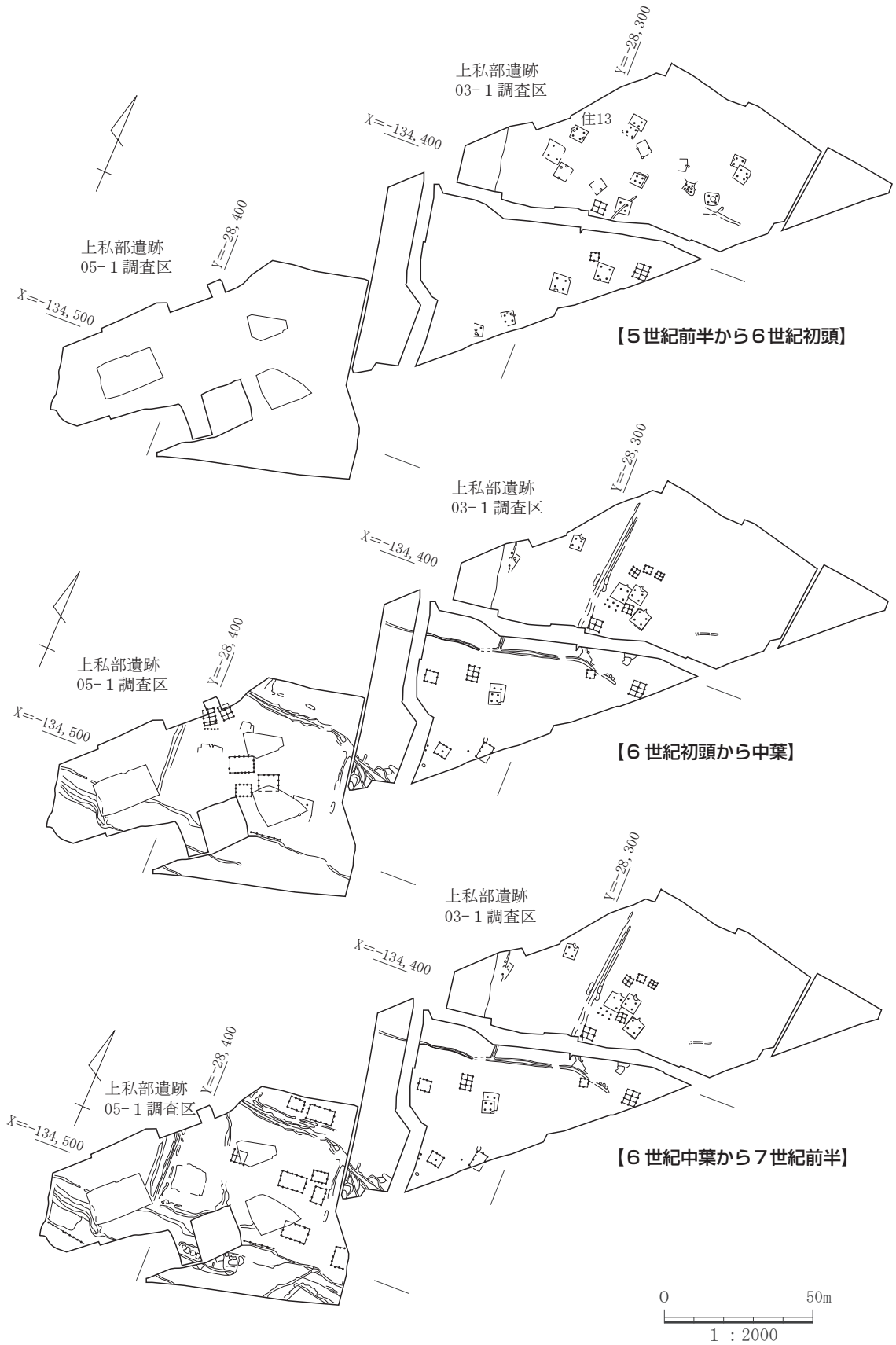


図 12 上私部遺跡遺構変遷図

は、同時期に栄根遺跡、加茂遺跡、下加茂遺跡に住居数が増加し、園田大塚山古墳築造小地域では、若王子遺跡、平田遺跡にて鍛冶関連遺物とともに多量の土器が出土している。したがって、以上にみる桜井谷窯跡群やその管理集落の存在、猪名川下流域の鍛冶生産工房なども含めて、6世紀前半に勃興するあり方を追認できるだろう。

こうした6世紀の変化は、列島内部の要因としては、大阪北部に1つの拠点をおいた継体期における政治変動によるところが多いが、さらにその外因を探っていくと倭と百済の関係強化を含めた韓半島各地との関係再編が反映しているとみることもできる。この時期に4世紀後葉から5世紀代において倭の中央政権主導勢力と深いかかわりを有する大阪南部の古市・百舌鳥古墳群が衰退する点をふまえると、列島中枢における政治変動と対外情勢の変化が、地域社会の遺跡動態にも緊密にかかわっている点を指摘したい。

おわりに

5世紀代における栄山江流域を中心とする全羅道地域と日本列島の近畿地域との相互交流の実態について、集落遺跡と土器資料を中心に論じてきた。第一章では、4～5世紀の東アジア情勢を概観した上で、日本列島と韓半島南西部で共有された儀礼用土器の存在に着目し、両地域の交流関係を指摘した。儀礼用土器以外にも視野を広げてこの論点を深めるために、第二章では韓半島出土須恵器に関する検討を行い、双方向的な交流実態を探った。第三章および第四章では、双方向的な人的交流が倭人社会にどういった影響を及ぼしたのかといった点を解明するために、5世紀代の近畿地域を対象に、韓半島系渡来人が果たした役割について考察を加えた。

その要点は、次の通りである。すなわち、1) 韓式系軟質土器の主要な系譜は百済・馬韓もしくは加耶西部に求めることができ、河内湖周辺に最も分布が集中する、2) 韓半島系渡来人と手工業生産は密接に関係する、3) それと呼応して初期群集墳の築造が認められる。近畿地域にみる集落構造の変化は、同時期に栄山江流域においても指摘されている。この点は、これまで資料的な状況から十分に検討されてこなかった。しかしながら、現在の資料状況をもってすれば、栄山江流域における5世紀から6世紀にかけての集落や手工業生産遺跡の増加、土器様式や集落構造の変化とともに、日本列島の近畿地域における同調性まで議論が可能となってきた。本論は、主に手工業生産遺跡の分布や小規模古墳の築造動向に着目して、その背景についてささやかながら検討を加えたものである。

日韓各地における土器併行関係、本稿で取り扱うことのできなかった地域の動態など、さらに追及すべき事柄も少なくないが、5世紀代における百済・栄山江流域との相互交流が、倭人社会にとっては社会資本投資といった戦略へとつながっていったことが、その後の時代を形作る上で基盤となった可能性を記して、本論の結びとしたい。

[謝辞] 本稿を成すにあたり、本共同研究の代表である高田貫太氏に多大なるご教示と資料実見の機会をお与えいただいたことを、まず感謝申し上げたい。とりわけ共同研究の一環として、2014年10月に大韓文化財研究院の李瑛澈院長、鄭一氏をはじめとする大韓文化財研究院の方々、嶺南

大学の朱洪奎氏とともに全羅道地域出土須恵器および須恵器系土器を実見した資料調査は、本論の基礎となっている。共同研究で得ることができた着想は、大韓文化財研究院 2014 下半年国際学術大会（2014 年 11 月）、奈良での共同研究会（2015 年 7 月）、歴博国際シンポジウム「古代日韓交渉の実態」（2016 年 3 月）において口頭発表した。その折、共同研究に参加する各氏よりいただいた数々のご教示が内容を深めることとなった。また文献検索では禹在柄氏、趙晟元氏、土田純子氏、慎イスル氏、野田勇人氏に助けていただき、資料調査は次の機関にご高配を賜った。末筆ながらも、謝意を表したい。

愛知県埋蔵文化財調査センター、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、奥州市埋蔵文化財調査センター、大阪府教育委員会、大阪府文化財センター、大阪文化財研究所、香川県教育委員会、鹿児島県立埋蔵文化財センター、橿原市教育委員会、川西市教育委員会、滋賀県文化財保護協会、四條畷市教育委員会、四條畷市立歴史民俗資料館、たつの市教育委員会、豊中市教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、寝屋川市教育委員会、東大阪市立埋蔵文化財センター、兵庫県立考古博物館、埋蔵文化財天理教調査団、松前町教育委員会、明和町教育委員会、龍谷大学附属平安中学校・高等学校、和歌山県立紀伊風土記の丘、圓光大学校百済・馬韓研究所、韓国国立羅州博物館、韓国国立光州博物館、湖南文化財研究院、全州文化遺産研究院、大韓文化財研究院、忠南大学校百済研究所、韓神大学校博物館、釜慶大学校博物館、木浦大学校博物館

註

(1)——筆者は、これまで古墳時代中期の画期を土器研究の立場から須恵器出現に求めてきたが、2015 年夏の大阪府文化財センターによる津堂遺跡の発掘調査とその整理作業の進展を基礎に、津堂城山古墳が築造された時期と考える布留 3 式以降を古墳時代中期と考えるようになった。その暦年代に関しては、現状では 4 世紀後葉を想定している。ただし、古墳副葬品編年と土器編年に関しては、詳細に吟味すべき資料群もあることも、ここで補足しておきたい。

(2)——日本列島近畿地域においては、須恵器出現に先立つ布留 3 式期に焼成後に穿孔し、仮器となす小型丸底土器は、奈良県・菅原東遺跡 SX22 などに類例がある。しかし、こうした資料は現状では細い木筒などを指して、給仕に用いたとは考え難く、機能的類似性を認めることは難しいと考えている。

(3)——この視座は、2016 年 3 月に開催された本共同

研究シンポジウムにおいて、筆者発表に寄せられた権五榮氏のコメントによってひらけてきた。氏のご教導にこの場をお借りして、謝意を表したい。

(4)——5 世紀代において河内湖周辺と奈良盆地では、韓式系軟質土器の出土遺跡数や器種構成に差異があるばかりでなく、集落単位にわけいて検討するとその受容度合いに大きな差がある [中久保 2009, 中野 2012]。より河内湖周辺が韓半島系土器受容の中核地となることをここで強調しておきたい。

(5)——栄山江流域の集落における画期は 5 世紀後半と推定されており、近畿地域における集落内部構造の変化と連動するといえるが、韓半島系土器の増加と受容に関していえば、近畿地域では先行する 5 世紀前半には確実に認められる。この時期的な齟齬については、両地域の土器併行関係に関する検討を一層推し進めて、再吟味する必要がある。

参考文献

(日本語)

- 青柳泰介 2005 「大和の渡来人」『ヤマト王権と渡来人』大橋信弥・花田勝広編 サンライズ出版
 青柳泰介 2014 「南郷遺跡群と葛城地域—古墳時代中期の土器様相と遺跡の関係からみられる画期を中心に—」『韓式系土器研究』XIII 韓式系土器研究会

-
- 安在皓 1993「土師器系軟質土器考」『伽耶と古代東アジア』新人物往来社
諫早直人 2012「東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究」雄山閣
石部正志 1980「群集墳の発生と古墳文化の変質」『東アジア世界における日本古代史講座』第4巻 学生社
井上主税 2008「朝鮮半島南部出土の土師器系土器について」『韓式系土器研究』X 韓式系土器研究会
井上主税 2014「朝鮮半島の倭系遺物からみた日朝関係」学生社
井上美奈子 2004「韓国慶尚南道出土の有孔廣口小壺について」『専修考古学』10 専修大学考古学研究室
今津啓子 1994「渡来人の土器—朝鮮系軟質土器を中心として—」『古代王権と交流 ヤマト王権と交流の諸相』名著出版
植野浩三 1987「韓式系土器の名称」『韓式系土器研究』I 韓式系土器研究会
植野浩三 1998「須恵器生産の展開」『中期古墳の展開と変革』埋蔵文化財研究会
植野浩三 2002「TK73 型式の再評価—高杯の消長を中心にして—」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会
植野浩三 2005「渡来人と手工業生産の展開」『ヤマト王権と渡来人』大橋信弥・花田勝広編 サンライズ出版
大阪府教育委員会 1980『陶邑』V
大阪府立近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし：陶邑の須恵器』平成17年度冬季企画展図録
大庭重信 2006「長原古墳群」『シリーズここまでわかった考古学 太秦古墳群発掘調査成果関連行事 大阪の初期群集墳を考える』大阪府立近つ飛鳥博物館・大阪府文化財センター
大庭重信ほか 2005『長原遺跡発掘調査報告』XII 大阪市文化財協会
大庭重信・杉山拓己・中久保辰夫 2006「ス・コゲからみた長原遺跡古墳時代中期の煮炊具の使用法—小型鍋（平底鉢）を中心にして—」『大阪歴史博物館研究紀要』第5号 大阪歴史博物館
岡戸哲紀 1997「第VI章第2節 古墳時代中期における伏尾集落の位置づけ」『陶邑・伏尾遺跡Ⅲ A地区』大阪府教育委員会・大阪府文化財調査研究センター
岸本道昭 1989「長原古墳群の歴史的意義」『大阪文化財論集—財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集—』大阪文化財センター
亀田修一 1993「考古学からみた渡来人」『古文化論叢』30（中）九州古文化研究会
亀田修一 2012「渡来人」『古墳時代研究の現状と課題』下 土生田純之・亀田修一編 同成社
北山峰生 2007『四条シナノ古墳群』奈良県立橿原考古学研究所
北山峰生 2008『松山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
京嶋 覚 1997「初期群集墳の形成過程—河内長原古墳群の被葬者像をもとめて—」『立命館大学考古学論集』I 立命館大学考古学論集刊行会
久住猛雄 2014「『博多湾貿易』の成立と解体・再論—土器からみた倭と韓半島の交易網の変遷—」『금관가야의 국제교류와 외래계 유물』제20회 가야사국제학술회의 인제대학교 가야문화연구소
小池 寛 1998「題考」『瓦衣千年 森郁夫先生還暦記念論文集』森郁夫先生還暦記念論文集刊行会
小池 寛 1999「有孔廣口小壺の祖形」『朝鮮古代研究』第1号 朝鮮古代研究刊行会
古代学研究会 2012『古代学研究会2012年度拡大例会シンポジウム資料集 集落から探る古墳時代中期の地域社会—渡来文化の受容と手工業生産—』
小浜 成ほか 2005『総持寺遺跡—古墳時代中期の小規模古墳群の調査—』大阪府教育委員会
近藤義郎 1952『佐良山古墳群の研究』津山市
酒井清治 1994「わが国における須恵器生産の開始について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集 国立歴史民俗博物館研究報告
酒井清治 1998「日韓の甗の系譜からみた渡来人」『植崎彰一先生古稀記念論文集』植崎彰一先生古稀記念論文集刊行会
酒井清治 2004「須恵器生産のはじまり」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集 国立歴史民俗博物館
酒井清治 2005「韓国榮山江流域の土器生産とその様相—羅州勢力と百濟・倭の関係を中心にして—」『駒澤考古』第30号 駒澤大学考古学研究室
酒井清治 2013『土器から見た古墳時代の日韓交流』同成社
櫻井久之 2001「長原遺跡の小方墳」『大阪府埋蔵文化財研究会（第43回）資料』大阪府文化財調査事務所
白石太一郎 1976「石光山古墳群の提起する問題」『葛城・石光山古墳群』奈良県立橿原考古学研究所
陣内高志 2013「大阪府豊中市桜井谷窯跡群2-2号窯跡」『考古学研究』第60巻第1号 考古学研究会
-

- 鈴木一有 2016「朝鮮半島出土倭系武装具の全容」『古代日韓交渉の実態』歴博国際シンポジウム資料集 国立歴史民俗博物館
- 鈴木靖民 2002「倭国と東アジア」『日本の時代史』2 倭国と東アジア 吉川弘文館
- 清家 章 2001「猪名川左岸域における小古墳の意義—埴輪の規格から見た地域支配—」『待兼山遺跡』Ⅲ 大阪大学埋蔵文化財調査委員会
- 高田貫太 2014『古墳時代の日朝関係—新羅・百済・大加耶と倭の交渉史—』吉川弘文館
- 高橋克壽 2007『金工技術から見た倭王権と古代東アジア』平成16～18年度科学研究費補助金基盤研究(C)(課題番号16520479)成果報告書 奈良文化財研究所
- 武末純一 1988「朝鮮半島の布留式系甕」『日本民族・文化の生成』1 永井昌文教授退官記念論文集 永井昌文教授退官記念論文集刊行会
- 武末純一 1989「小形丸底埴の軌跡—考古学から見た日朝交流の一断面—」『古文化談叢』第20集 九州古文化研究会
- 武末純一 1991『土器からみた日韓交渉』学生社
- 武末純一 2004「加耶と倭の交流」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集 国立歴史民俗博物館研究報告
- 武末純一 2012「新鳳洞古墳群にみられる日本文化要素」『清州 新鳳洞百済古墳群発掘30周年記念国際学術会議』忠北大学校博物館
- 田中清美 2002「須恵器定型化への過程」『田辺昭三先生古稀記念論文集』田辺昭三先生古稀記念の会
- 田中清美 2005「河内湖周辺の韓式系軟質土器と渡来人」『ヤマト王権と渡来人』大橋信弥・花田勝広編 サンライズ出版
- 田中晋作 1996『古代国家の黎明—四世紀と五世紀の狭間で—』池田市歴史民俗資料館平成八年度特別展図録
- 田中史生 2005『倭国と渡来人 交錯する「内」と「外」』吉川弘文館
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯跡群』Ⅰ 平安学園考古クラブ
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 田村美沙 2010「千里窯における古墳時代後期の須恵器生産とその供給」『待兼山考古学論集』Ⅱ 大阪大学考古学研究室
- 寺井 誠ほか 2006『長原遺跡発掘調査報告』XV 大阪市文化財協会
- 寺井 誠 2007「孝徳朝難波遷都に伴う古墳の破壊」『大阪歴史博物館研究紀要』第6号 大阪市文化財協会
- 寺井 誠 2016「日本列島における出現期の甕の故地に関する基礎的研究」平成25～27年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 大阪市博物館協会大阪歴史博物館
- 寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 寺沢知子 1985「渡来系集団墓の一樣相」『同志社大学考古学シリーズⅡ 考古学と移住・移動』森浩一編 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 寺前直人 2001「古墳時代中期における倭王権の地域支配方式—豊島地域における小古墳の検討を通して—」『待兼山遺跡』Ⅲ 大阪大学埋蔵文化財調査委員会
- 富山直人 2005「播磨における大陸との交流」『ヤマト王権と渡来人』大橋信弥・花田勝広編 サンライズ出版
- 豊島直博 2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』塙書房
- 中久保辰夫 2008「摂津地域における古墳時代中期の煮炊器」『待兼山遺跡』Ⅳ 大阪大学埋蔵文化財調査委員会
- 中久保辰夫 2009「古墳時代中期における韓式系軟質土器の受容過程」『考古学研究』第56巻第2号 考古学研究会
- 中久保辰夫 2010「陶邑における韓式系軟質土器の変容過程」『韓式系土器研究』XI 韓式系土器研究会
- 中久保辰夫 2012「渡来人がもたらした新技術」『古墳時代の考古学』第7巻 同成社
- 中久保辰夫 2013「渡来系集団の定着過程と河内地域の集落展開」『古代学研究』第199号 古代学研究会
- 中久保辰夫 2014「古墳時代原初の官僚層形成に関するノート」『待兼山論叢』第48巻 大阪大学大学院文学研究科
- 中久保辰夫 2017『日本古代国家の形成過程と対外交流』大阪大学出版会
- 中野 咲 2007「近畿地域・韓式系軟質土器集成」『渡来系遺物からみた古代日韓交渉の考古学的研究』和田晴吾編 立命館大学文学部日本史学専攻考古学コース
- 中野 咲 2008「韓式系軟質土器」分布論の現状と課題」『橿原考古学研究所論集』第十五 八木書店
- 中野 咲 2012「蒸し調理の普及からみた渡来系文化の受容過程—古墳時代中・後期における奈良盆地の事例について—」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』第35冊 奈良県立橿原考古学研究所

- 中野 咲 2013「古代大和のカマド導入期の土器様式の変化」『研究紀要』第18集 由良大和古代文化研究協会
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・橿原市教育委員会 2006 『海を越えたはるかな交流』 秋季特別展図録
- 西嶋定生 1961「古墳と大和政権」『岡山史学』10号 岡山史学会
- 花田勝広 1989「倭政権と鍛冶工房—畿内の鍛冶專業集落を中心に—」『考古学研究』第36巻第3号 考古学研究会
- 花田勝広 2002『古代の鉄生産と渡来人—倭政権の形成と生産組織—』 雄山閣
- 土生田純之 1994「畿内型石室の成立と伝播」『ヤマト王権と交流の諸相』5 名著出版
- 坂 靖 2009『古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化—』 雄山閣
- 坂 靖 2013「古墳時代中期の遺跡構造と渡来系集団」『古代学研究』第199号 古代学研究会
- 坂 靖・中野 咲 2016『古墳時代における渡来系集団の出自と役割についての考古学的研究』平成24～27年度
日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書 奈良県立橿原考古学研究所
- 菱田哲郎 2007『古代日本 国家形成の考古学』 京都大学学術出版会
- 広瀬和雄 1984「群集墳研究の課題と方法」『歴史科学』96号 大阪歴史科学協議会
- 福田桂子 2006「須恵器の定型化の背景」『溯航』第24号 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会
- 福永伸哉ほか 1991『桜井谷窯跡群2-23号窯』 豊中市教育委員会
- 福永伸哉 1998「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論集』第12集 韓国文化研究振興財団
- 福永伸哉 2004「畿内北部地域における前方後円墳の展開と消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較
研究』平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書 大阪大学大学院文学研究科
- 福永伸哉 2007「継体王権と韓半島の前方後円墳」『勝福寺古墳の研究』 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室
- 福永伸哉・中久保辰夫編 2015『21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信』平成23年度～
26年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書 大阪大学大学院文学研究科
- 藤田道子 2011「部屋北遺跡の渡来人と牧」『ヒストリア』第229号 大阪歴史学会
- 朴天秀 2007『加耶と倭—韓半島と日本列島の考古学—』 講談社選書メチエ
- 堀田啓一 1993「渡来人—大和国を中心に—」『古墳時代の研究』第13巻 雄山閣
- 松本正信ほか 2000『山津屋・黍田・原』 兵庫県揖保川町教育委員会
- 右島和夫 2012「群集墳」『古墳時代研究の現状と課題』下 土生田純之・亀田修一編 同成社
- 三崎良章 2012『五胡十六国 中国史上の民族大移動』 新訂版 東方選書
- 宮崎泰史ほか 1995『陶邑Ⅷ 泉州における遺跡の調査』I 大阪府教育委員会
- 森岡秀人・吉村 健 1992「撰津」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社
- 山田邦和 1998『須恵器生産の研究』 学生社
- 吉田 晶 1998『倭王権の時代』 新日本出版社
- 和田晴吾 1992「群集墳と終末期古墳」『新版 古代の日本』第5巻 近畿I 角川書店
- 和田晴吾 2003「古墳時代の生業と社会—古墳の秩序と生産・流通システム—」『考古学研究』第50巻第3号 考
古学研究会
- 和田晴吾 2004「古墳文化論」『日本史講座』第1巻 東アジアにおける国家の形成 歴史学研究会・日本史研究会
編 東京大学出版会
- 李暎澈 2016「集落からみた榮山江流域・百濟・倭」『古代日韓交渉の実態』 歴博国際シンポジウム資料集
国立歴史民俗博物館
- 若狭 徹 2002「古墳時代の地域経営—上毛野クルマ地域の3～5世紀—」『考古学研究』第49巻第2号 考古学研
究会
(韓国語)
- 권오영 2007「住居構造와 炊事文化를 통해 본 백제계 이주민의 일본 畿内地域 정착과 그 의미」『韓國上古史學報』
第56号 韓國上古史學會
- 권오영 2010「백제 변경에서 확인되는 왕경인의 물질문화」『韓國上古史學報』第67号 韓國上古史學會
- 盧美善 2004「有孔廣口小壺小考」『研究論文集』4 호남문화재단연구원
- 盧美善 2011「전북 지역의 유공광구소호」『유공소호』 国立光州博物館・大韓文化遺産調査センター
- 朴天秀 2009「考古學을 통해 본 新羅와 倭」『湖西考古学』第21号 湖西考古學會
- 徐賢珠 2006『榮山江流域古墳土器研究』 学研文化社
- 徐聲勳・成洛俊 1984『靈岩 萬樹里古墳群』 国立光州博物館・百濟文化開發研究院
- 申敬澈 1999「加耶出土 土器系土器의 意義」『加耶의 對外交渉』第5回加耶市學術會議 金海市

-
- 禹在柄 2005 「5世紀頃 日本列島 住居様式에 보이는 韓半島系 炊事・暖房시스템의 普及과 그 背景」『百濟研究』第41輯 忠南大學校百濟研究所
- 禹在柄 2014 「5～6世紀 墓制의 連續과 斷切로 본 百濟 西南部地域의 政治的動向」『先史와古代』第42号 韓國古代學會
- 李殷昌 1978 「『有孔廣口小壺』考」『考古美術』136・137 韓國美術史学会
- 李瑜眞 2008 「5～6세기 유공광구호의 변천과 분포」『嶺南考古學』第46号嶺南考古學會
- 조성원 2016 「영남지역 출토 4～5세기대 土師器系土器의 재검토」『韓國考古學報』第99輯 韓國考古學會
- 韓芝守 2002 「4 C 百濟地域에서 出土된 東晋代 瓷器의 歴史的 意味」中央大學校大学院碩士學位論文
- 木下 亘 2003 「韓半島出土의 須惠器(系) 土器について」『百濟研究』37輯 忠南大學校百濟研究所
- 土田純子 2013 『百濟土器編年研究』 忠南大學校大学院博士學位論文

(京都橘大學文學部, 國立歷史民俗博物館共同研究員)

(2018年5月24日受付, 2018年12月10日審査終了)

The Mutual Interaction between Wa, Baekje, Yeongsan River Basin and its Historical Role

NAKAKUBO Tatsuo

This paper explores the interactions between Jeolla Province, centered on the Yeongsan River basin, and the Kinki region, located in the middle of the Japanese archipelago, in the fifth century by looking at the earthenware excavated from the tumuli and settlements of the Japanese Kofun period and the Three Kingdoms period in the Korean Peninsula. For that purpose, I analyzed the following archaeological materials.

First, after reviewing East Asia in the fifth century, I focused on the ritual pottery called Hasou (a teapot like small jar with a wide mouth and a hole) and assessed that this earthenware was used widely in both the Japanese archipelago and various parts of the Korean Peninsula, especially in Jeolla Province, in the fifth century. Second, I reexamined the identification of the period of Sue ware (unglazed ceramics), which has been excavated in increasing numbers since 2000, and confirmed the interactions between the Japanese archipelago and Baekje and the Yeongsan River basin in regard to Sue ware; this also involved reassessing the production of Sue ware in the Japanese archipelago. It is possible to understand the interactions seen from the earthenware described above by connecting the dynamics of the Korean-type earthenware, the production base of handicraft, and the early type of small tombs excavated from the settlements that developed organically in the Kinki region. As a third point of the discussion, I presented the idea, based on the research trends of recent years concerning earthenware, settlements, and small-scale tumuli, that the interactions with Baekje and the Yeongsan River basin had promoted social capital investments within the Kinki region.

The above archaeological examinations clarified the circumstances of the interactions with Wa (Japan) in Jeolla Province in the fifth century, which has so far remained unclear from the excavated material from the tumuli/tombs, and I was able to confirm the significant role the interactions between the peoples played in the social changes in the Wa society. In the sixth century, the Baekje and Wa began active interaction, but it is difficult to regard such a movement as part of the continuous process carried over from the fifth century; we can also recognize the dynamic changes that involved the central as well as regional societies in the Kinki region.

Key words: Kofun period, Three Kingdoms Period, Korean-Style earthenware, Craft production, early small tomb group
